ギムリの夜明け

ニック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ギムリの夜明け

【Ｎコード】
Ｎ６７７６Ｊ

【作者名】
ニック

【あらすじ】
ゼロの使い魔の世界に転生したというお話。
しかし転生先が超モブキャラのギムリ。
え？だれそれ？私もよく知りませんって！
脆弱な精神の現代人にこの世界は厳しい。
原作に関わらないように戦乱の世を生き抜きたい主人公の向かう先はいったいどこに！？

プロローグ（前書き）

よろしくお付き合いください。

プロローグ

私の名は結城真人（ゆうき まこと）２５才にして♂独身貴族（笑）のサラリーマンだった。

営業成績だって若手にしたらそう悪いほうでは無かったはずだし会社内での人付き合いもボチボチうまくやってた、昨日の晩だって会社の上司と日本の広告業界に夜明けは来るのかという話題で盛り上がり、家に帰ってきてそのままベッドに倒れてその後は……思い出せない。

そして気がつくと視界は暗く、めがねを外したようにピントが合わない。

だが、そんな中でも冷静になれ！と暴れだしそうな心を制御し現状の把握に努める。

誘拐か？

なにかの薬品を投与されたのか？

さまざまな検証を行い情報を纏めて自分なりに噛み砕いて吸収する。

そして結論をだした。

まさか私がこのセリフを地で発する日がくるとは―――

「おぎゃやぁあああああああああああああぁ！！！！！

（目が覚めると俺は赤ん坊になっていたんだぁぁぁぁぁ！！！！）」

そして――――

とりあえず、自分の置かれた状況を把握するのに数日かかった。

いや、激しく認めたくない事態なだけに受け入れるのに時間をようしたと言ったほうがいいだろう。

ここはトリステイン王国アッシュモンド男爵領アッシュモンド男爵邸であり。

私は風のラインメイジであるガイル・ド・アッシュモンド男爵と火のトライアングルメイジであるメアリー・ド・アッシュモンド男爵夫人の間に長男坊として生まれ、名はギムリ・ド・アッシュモンドと名づけられた。

『トリステイン』

『メイジ』

『ギムリ…』

うん。

間違いなく『ゼロの使い魔』ですね。わかります。

いや、わかりたく無い。認めたくない。

ギムリってあれですよね？

原作1巻でキュルケ嬢になんやかんやでフラれて…その後は知りません。

スーパーモブキャラじゃねーか。

しかも、レコン・キスタやらガリアやらロマリアやら、何かと波乱続きのトリステイン貴族…もう駄目だ。

とりあえず、最低限自分が生き抜けるだけの力はつけよう！

そして原作キャラとは極力係わり合いにならないようにしよう！

学院に入る時期さえずらせば、なんとかなるはずだ！うんうん。

「ふふ、見てガイル！　ギムリったらこんなに元気に泣いてるわ」
「うむ！　この子泣き具合はアッシュモンド男爵家を継ぐ器に相応しい貫禄だ！　さっそく家庭教師を雇わねばな！」
「あらあらガイルったら気が早いんだから」

そんなこんなで私がハルケギニアに転生して5年がたった。
乳児期の様子については散々であった…とだけ言っておく。
母上や、屋敷のメイド達には一生頭が上がらないであろう。
環境の変化で困った事はけっこう多かった。
まずはお風呂である。
原作では貴族は普通に風呂に入っていたのだが、アッシュモンド家の風呂は蒸し風呂だったのだ。
まぁ、ヨーロッパ風のサウナのようなものだ。
サウナに入った後水釜に入り汗を流すのだが、問題は風呂に入る時に必ずメイド達が世話を焼きに一緒に入ってくる事だった。
もちろん私もメイドもスッポンポンである。
羞恥心やら、裸の女性を見ても興奮しない自分の体を嘆いたりと、とりあえず大変だった。
ちなみに言語や文字の習得は同年代の子供に比べると遅れ、父や母に「アレナニ？」「コレハ？」「ドンナモノ？」

を連発しまくった。
どうやら意識年齢のほうはそのままのようで、知識をスポンジのように吸収…とはいかなかった。
それでも、立ち上がれるようになった後は、それなりに体を動かすようにしていたし、魔法についても父や母に怪しまれない程度に子供の好奇心を装って聞き出したり精力的に活動していた。

私の行動指針は決まっていた。
とりあえず原作キャラとの学院の年代をずらす！できればゲルマニア辺りに留学…
学院入学前に目標トライアングルメイジ！
学院ではライン辺りと嘘で誤魔化す！
卑怯者と罵ってくれてけっこう！
合言葉は「世の中生き残ってなんぼ」である！

そんなこんなで駆け抜けるように過ぎた5年間だった。

ｓｉｄｅカイル・ド・アッシュモン（ギムリの父）

自分の息子ながら我が子は他の子供とはいい意味でも悪い意味でも少し違うと思う。
気がついた頃には自分の足で立とうと、壁に手をつきながらもフラフラと歩く訓練をしていた。
なんと早熟な子なんだ！と息巻いていたら、３年４年たってもなかなか言葉や文字を解するようにはならないので、心配になったり、言葉や文字を覚えたと思ったら大人ですら困難な計算を瞬時にしたりと…正直訳がわかない程変だけど可愛い我が子という印象である。

とりわけ体を動かす事が好きなようで、天気が良い日は「健全なる魂は健全なる肉体に宿るのだー」と叫びながら庭を走り回ったり、雪の日には「ヤッハー！　スノーパラダイス！　雪風になって～♪」っと奇声をあげながら庭を走り回ったり、誰かと共に風呂に入るのを嫌い、夜になるとメイド達に追いかけられながら「後生でござる！　１人で入れるでござるよー！」と叫びながら走り回ったりっと…。

本当に不思議な子供に恵まれたものだ。

「なぁ？　メアリー？」

ｓｉｄｅメアリー・ドアッシュモンド（ギムリの母）

我が子ギムリは変な子です。
あれは言葉をやっと覚えた４歳くらいの頃でしょうか―――

「母上！　魔法が使いたいです！」
とギムリが鼻息荒く私に詰め寄り、火のトライアングルメイジである私は息子が魔法に興味を示したことに喜び、早速『ファイアー・ボール』や『フレイム・シャワー』を見せてあげました。

「母上…魔法ってすごいですね」
「ふふふ、ガイルは風のラインで私は火のトライアングルだからあなたの系統はどっちかね」
「母上！　せっかくだから全系統魔法の習得を頑張ります！」
「え？それはさすがに「イキマス！」…え？」

そういうと我が不肖の息子ギムリは杖も持たず両手を前に突き出し重心を低くし…

「解き放て我が内なる魔力よ！　精霊よ！　我が呼びかけに答えよ！　最終究極魔法マ・ダ・ン・テェェェェェェェェ！！」
聞いたことも無い詠唱を行い、何かを吐き出すように前に突き出した両手を合わせ…
何も起きませんでした。

「あれ？」
「……」

この子は大丈夫でしょうか？

杖との契約について教えなかった私が悪かったのでしょうか？

とりあえず将来が心配になったある日の出来事でした。

「ガイル、きっと大丈夫よ……たぶん」

プロローグ（後書き）

楽しんでもらえるようにがんばりたいとおもいます。

ギムリ・ド・アッシュモンド（前書き）

超モブキャラですw
田舎っ子ですw

ギムリ・ド・アッシュモンド

この体に転生し幾重もの月日を越えて、１５歳になった私は本格的に将来に向けて訓練をしている。

体のほうは、体格のいい父からの遺伝なのか１８０センチ程まで伸びかなり恵まれた体格をしている。同じく父譲りの金髪碧眼。肌は日に程よく焼けた健康的な肌色といえる。

あいにく、小さい頃から無駄に筋トレをしていたせいか、前世で憧れた『程よい細マッチョの外国人』ではなく。

『筋骨隆々一歩手前の外国人』になってしまったのだが、それは生き抜く為には仕方ないと諦めた。

それでも、幼少時から暇を見ては筋トレ（腕立て＋腹筋）＆ダッシュをしていた成果はあるとハッキリ言えるのではないだろうか。

ちなみに父上のダンディーな体つきはどう鍛えたのか？っと聞いたら、初代アッシュモンド男爵より伝わる伝統的な訓練として、穴掘り＋うさぎ跳びを紹介されたが、現代スポーツ医学に真っ向から勝負を挑んでいるようなモノばかりなので無視した。

なので両親に頼み込んで、元王国騎士の兵に前線での戦闘術を学び「純粋な格闘なら下手な傭兵よりは強い」となんとも言えない評価も貰っている。

ちなみに私の思う強さランキングではこうなっている。

★烈風カリン＞＞虚無＞＞＞＞超えられない壁＞各王国騎士団＞上級（ニエス）傭兵＞私＞ボンクラ傭兵＞へぼ貴族（魔法学院一般生徒）＞平民（ア）★

烈風カリンが強すぎないかって？

いやいや、あの人はなんかもう怖いんだって！色々！
私の魔法教師や体術教師などは、「烈風カリンが敵に回ったら死んだふりをしてやり過ごせ！運がよければ生き抜ける！」っと教わっている。
ルイズ母よ！あんたどんだけやんねん！

ちなみに、両親に体術や格闘術の訓練教師を雇ってくれないかと頼み込んだ時、なぜかあっさりと許可が貰えたのは驚いた。
基本的にトリステインという国は魔法重視の社会であり。
魔法を用いない戦術などは基本的に評価されない。
これをもって、典型的なトリステイン貴族の父は反対するかと思いきや、なぜか「またギムリの変な癖が始まったか…」と両親揃って生暖かい視線をおくられたのはいい思い出だ。
その後、妙に使用人達が私を気遣うような態度に全俺が泣いた。

さて、見た目こそ体育会系全開な私だが、実は魔法のほうが得意だったりする。
１５歳現在で風のトライアングルにまで上がった。
原作で云うタバサ嬢と一緒ですね。
原作でギトー教師が風の魔法は最強だとかなんとか言っていたが、私は最強とは思わないが非常に応用の利く系統だと思う。
風系統はエア・カッターのようなＴＨＥ風系統！っという魔法から『ライトニングクラウド』のような電気・雷系さらに『ウィンディ・アイシクル』のような氷雪系なども使えるからだ。
ハッキリ云ってやりたい放題の系統じゃないか？と思ったのは私だけでは無い筈だ。

個人的には電気・雷系の魔法を中心に運用している。
なぜなら・・・『ネタ魔法』の再現がしたいからである！
雷属性をもたせた剣を振るう『神鳴流奥義・雷鳴剣（笑）』やライトニングクラウドに全精神力を収束させた魔法『サンダースマッシャー（笑）』っと某魔法少女が使える魔法の真似が出来たりするのだ。
これが面白くないハズがないじゃないか！

やっほーーーーい！

ちなみにラインからトライアングルに上がった時は『スターライトブレイカー（笑）』を初めて使ってぶっ倒れ、気がつくとトライアングルになっていたというオマケ話つきだ。
まぁ、私の魔法の練習を見ていた母と使用人達が、奇行に走ってぶっ倒れるのはいつもの事だと特に騒ぎもせず、とりあえず「トライアングルに昇格おめでとう」とだけ言われた時は不覚にも目から心の汗が飛び出した。
けっこう頑張ったんです。
元典型的な日本人現代っ子が毎日精神力切れ寸前まで練習したんですよ？
愛をください。

最後に領地についてだが、うちのアッシュモンド領はトリステインの南東に位置した狭い領である。平地の土地に1本の大きな川がある。人口は大体３００人くらいのこれは村じゃないか？っとさえ思う程のド田舎である。東の森を越えるとすぐゲルマニアで、南の

山を越えるとガリアである。
トリステインとゲルマニアかガリアが戦争になったら即殺間違い無し。
将来、私がアッシュモンド家を継いだときゲルマニアが攻めてきたら即降参しようと思っているのは内緒だ。
まぁ、重要拠点にはなりえないほどの田舎領なのであまり心配はしていない。
それでも自然に溢れるこの領はなかなかのもので、たまに趣味でいそいそと森でギターを弾いたりして黄昏ていると、「なんか絵になる男っぽくないですか？私？」と気分が高揚し、ついつい激しい曲まで大熱唱してしまう。
領民というかアッシュモンド村の民とは、残念ながらあまりコミュニケーションをとっていない。
ぶっちゃけ自分の事（訓練や将来設計）で精一杯だったんです！

領民には『将来の為に毎日苦行を積む期待の持てる人物』など、『ナイフを振り回し奇声をあげながら不可思議な訓練っぽいものをしている若君』等、ひとりで森で熱唱しているつもりが、殆どの領民の耳に入っており、当時歌っていた曲（日本語や英語）が『どこか不思議な歌詞だ』『曲調が斬新で素敵』『異人の歌か？』等、云われ、密かにファンを増やしていた事を知ったのは、かなり後であった。

そして今日も訓練に明け暮れ、くたくたの体で家に帰った時、なぜか父上が威厳の篭もった表情で1枚の羊皮紙を私に渡しながら言いました。

「ギムリ、学院に通いなさい」

「はい？」

「だから！お前がこの男爵領を受け継ぐ立派な貴族になるには、同世代貴族との触れ合いが大切だと私は思いたったのだ」

「え？　乳繰り合いですか？　それなら昨夜も父上はさぞ母上と「学院に行け！！」……痛！申し訳ありません」

オーマイゴット！！！！！

魔法学院とかすっかり忘れていました。

現在私は15歳…つまりこのまま学院に入れば間違いなく原作キャラと鉢合わせに…

まずい！非常にまずい！

「父上、できればもう少しこの家で修練を積んでいたいのですが…」

「ならん！お前も男爵家の貴族として社会を学ばねばならん！」

「さっきも同じ事言ってましたよ父上？　天丼ですか？　さすがです父上「黙って学院に行くのだ！！」……いや、その……ですかね？」

母上はそんな光景をニヤニヤ見ながら―

「ギムリ学院を卒業して、立派な貴族となって帰ってくる事を母は祈っていますよ」

っと私を抱きしめました。

「母上しかし・・・」
なおも反論しようとする私を畳み掛けるように
「さらばだギムリ！しばしの別れだ！」
「逝ってらっしゃい。元気で過ごすのよ」
〈ドン〉
首に何かが当たる衝撃を感じ、私は気を失ってしまうのでした。

トリステイン魔法学院

言うまでも無くこのパターンは……ｏｒｚ。

目が覚めたら目の前には魔王の城が…もといトリステイン魔法学院だった。

この際、本気で魔王城と呼んでいい気がする。

いや呼びませんが。

私の乗った馬車は数日かけて、アッシュモンド領からここトリステイン魔法学院まできていた。

なぜ数日もかかったのに目を覚まさなかったか？

ハハ、簡単な推理だよボーイ&ガール！

私が起きそうになる度に使用人が『眠りの妙薬』を使って眠らされていたからだよ！

しかも水分はだけは取らせていたようだが数日間一切固形物を取らされていない。

腹が減って目が回るｏｒｚ

私、何キロ痩せたんだ？

―アッシュモンド流ギムーリ・ブートキャンプとか流行るだろうか？

もう諦めたよ。通えばいいんだろ？

うん！大丈夫！

ひたすら目立たず！

イベントの日は休めばＯＫ！

魔法は風のラインもう少しでトライアングルですぐらいですまそう！

うん！生きられる！

覚悟を決め入学の手続きや入寮の為に荷物を馬車から降ろそうとする。
荷物は、とりあえず杖と、予備の魔法発動体の腕輪、そして小ぶりのナイフ、そして一つの小さな袋？
訂正する。
装備品以外で荷物と呼べるものが手の平サイズほどの小さな袋しか無い！

「は？」

思わず声が零れる。
そこに使用人がそっと後ろから現れた。
「ぼっちゃま、とりあえず袋の中に２０エキューございます。そのお金で今月から来月までは乗り切るようにとの旦那様からの仰せでございます」
「ちょ！待て！２ヶ月２０エキューってオカシ「では、頑張ってくださいませ坊ちゃま！さらばーーーー！！！」・・・・・」

それだけ言うと使用人は風のように去っていった。

「NOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO！！！！！！！！」
私は咆哮をあげた。
しかし声はむなしく響きもしなかった。

こうしていきなり極貧生活のスタートだったわけだが。
ちなみにトリステインの物価だが、平民が１年間暮らすのに必要な金は１２０エキューほど。
こう言うと２ヶ月くらい２０エキューでも暮らしていけそうだが、貴族の生活となると話はガラっと変わる！
中流貴族くらいになると一ヶ月で５００～１千エキューの消費は当たり前だ。
何に使うかは…正直よくわからんがな。
どちらにせよ、私はいきなり平民生活って訳だ。
早速出鼻を挫かれた私だが、そう悲観する事も無い。
食事は基本的に授業料込み、念願の浴槽式風呂も完備、個人部屋つきだ。
あれ？
ぜんぜん暮らしていける？
むしろビバひとり暮らし！？
さすがは天下のトリステイン魔法学院！！

「大丈夫だ！私の明日はまだ明るい！」
〈グゥ～～～～～～～～〉
「そういえば数日なんもお腹に入れてなかったんだ」

ギムーリ・ブートキャンプの効果は絶大だった。
とりあえず小銭片手に食堂に向かう、どこまでも締まらない私だった。

そんなこんなで私が学生生活を始めて1週間ほどがたった。

「お～！みんなやってるな～」

学院の生活にも大分慣れました。

私は大方の予想を裏切り平穏無事に学院生活をおくれている。と言っても親しい友人を作れているわけでもなく、むしろ作る気が無いと言ってもいい。

授業は基本的に教室の隅で大人しく受け、暇な時間は図書館などで魔法書を借りて部屋でもくもくと読むだけという暗～い学生生活である。

「ん？さすがにキュルケ嬢は無難にこなしてるな～」

現在はヴェストリ広場にて初級コモンマジック『レビテーション』の授業である。

私は案の定、広場の隅でふわふわ浮きながらみんなの授業を隠れて見学中である。

貴族の魔法教育は基本的に幼少時から各貴族事に行われているはずなのだが、実際には『レビテーション』も未だにろくに使えない生徒ばかりである。

それでも、タバサ嬢やキュルケ嬢は楽勝とばかりにはじめの授業

で見事なレビテーションを披露しタバサ嬢はそのままどこかへ失踪、おそらく人の気の無い所で本でも読んでいるのだろう。キュルケ嬢はそのまま広場で自慢気に空中浮遊をしながらウサギを射るかのような目で男子生徒を物色していた。
是非そのまま私以外の男達を巻き込んでやってください！私の精神的安定の為に！
と、広場の隅で誰にも目に触れられない場所にいるはずの私だが、不意に視線を感じてキョロキョロと視線の先を探ると…

「…あ」

タバサ嬢が私が隠れている木陰の向こう側でじっと私を見ていた。
タバサ嬢もといシャルロット・エレーヌ・オルレアン。
たしかガリア王ジョゼフの娘である王女イザベラの北花壇騎士団配下の騎士で、トリステイン魔法学院へ厄介払い同然に留学。
本人は私と同じ風のトライアングルで同じく私と同じように風のラインと情報を偽っている何かと私と類似点の多い原作キャラ。

「……」
「……」

流れる沈黙

「…こんにちは」
「……」

挨拶してみるも、沈黙。

「ハロー！　僕ギムーリだよ～♪　良い子のみんな元気かなぁ？」

とりあえず場を温めてみた。

「……」

しかし効果は無かった。

気まずい時間。

「えっと…私に何か御用でしょうかミス・タバサ？」

「べつに……」

……

……

……

……orz

タバサ嬢は私を一通り観察し終わったのか、視線を本に戻してそのまま読書にふけっていった。

え？

ナニコレ？

やっちまったーーーー！

原作キャラとハチ合わせちまった。

大丈夫だよね？

レビテーションくらいだもんね？

タバサフラグとか超絶死亡フラグなので是非そういうは主人公たるサイトくんたちに任せておこうと思います。

ヘタレ？

褒め言葉です。

我が身大事で何が悪い！

こうして、なんとも気まずい原作キャラとの邂逅を終えてしまった私だった。

日々之精進（前書き）

どうもニックです。
こんな私の作品をお読み頂きありがとうございます。

日々之精進

「フライ！」

詠唱を終えると私の足がすっと地面から離れる。
そしてしばらく安定を保ち

「エア・カッター！」

風の魔法を天空に向けて放つ。
もちろん『フライ』で飛行しながら仮想敵からの攻撃の回避も忘れない。
朝一番、校舎裏の隅で魔法と体術の練習。
これが私の日課である。
ごめんなさい嘘です。
たまに思い出したように早起きしてしまった時にはこうして訓練しています。
もちろん訓練は誰にも見られないように細心の注意を払っている。
目下最近の課題はマルチタスク（分割思考）である。
ハルケギニアのメイジは基本的に１つの魔法使用中は他の魔法が使えないというのが常識だが、私はそうは思っていない。
魔法は考えるよりも感じるイメージで使用するものである。
さらに１つの杖、いわいる魔法発動体から１つの魔法しかできないのらば、魔法発動体を２つ以上使用すればいいだけなのでは？っと幼いながらに思ったときがあり、その後は某アニメを参考にマルチタスク（分割思考）を用いた複数同時魔法発動を練習してきた。
はじめこそ、成功しなかったが１０年を超える練習の成果で３つまでなら魔法同時使用が可能になった。
これでも異例で、母にも父にも話していない。

知ったら異端だとかなんとか言われそうで怖かったからだ。
唯一知っているのは私の戦闘の師匠をしていた人だけだ。

「ん…そろそろ精神力がやばいな。続いて空中体術に変更だな」

エアカッターを打ち切り、懐からナイフを取り出しそれをひたすら振りぬく。
空中戦で格闘なんてと思ったかもしてないが、このナイフも実は魔法発動体である。
なぜ私がこんな方法で練習しているかというと理由は簡単だ。
基本的にメイジの戦闘に魔法の空中戦はほぼありえない。
あっても飛竜にのった竜騎士くらいだ。
つまり戦闘になれば上空に逃げてしまえばどうにでもなる！という訳だ。
これを思いついたとき、私は初めて前世の知識が役にたったと実感した。
二次創作作品の転生物ではどの作品の主人公も前世の知識を使って領地改革や超魔法能力を使っていたが、あいにく私の大学での専攻は日本文学だ。
とても役にたたない知識を学んでしまった事を今では後悔している。
しかも幼少時からほとんどの時間を魔法と体術に費やしてもトライアングル止まり。
体術もとてもじゃないが一騎当千なんぞにはなれなかった。
結果、世にもまれな、私というひたすら逃げる算段に特化したメイジが誕生したわけだ。
一通り訓練を終えると自分の部屋に戻り、汗を拭く。
非常に不本意だが本日も死亡フラグの回避のために頑張ろうと思います。

今日も今日とて『レビテーション』の授業です。
生徒も拙いながらも大分浮けるようにたってきたようです。

「ギムリィ～、君はどう思うんだい？」
「ん？マリコルヌ何がだい？」
「話ぐらいきけよ～」
「ふふ、聞いてるさ。　今日の晩餐の献立の話だろ？　えぇ～っと今日は…」
「えぇ～！！　ぜんぜん違うよ！　的外れもいいとこだよ！　大的外れだよ！」
「む！？　そうだったのか。　んで何の話だい？」

ツッコミ上手な彼はマリコルヌ・ド・グランドプレ君。
私が学院にきてはじめて出来た友人だ。
切欠は食堂で食べきれない量の食事に困っていたら、彼が物欲しそうに私の食事を見ていたので、よければ食べないかい？っと声をかけたら神を見たかのように私に感謝しながら私の食事を食べた事です。
持つべきものは食の友である。
「はぁ……だから舞踏会での事だよ～」
「ん？なんかあったのかい？」

話を聞けば先日に行われたスレイプニィルだか何だかの舞踏会で、キュルケ嬢に誰かが魔法を放ち、彼女の衣服が破れるという事件が

あったそうだ。
　もちろん私はそんなような原作イベントがある事は知っていたので、華麗にスルーして部屋で惰眠を貪っていましたよ。原作知識様様です。

「ふふ、やぁやぁ我が永遠の友人達よ。君達も犯人はミス・タバサだと思ってるのかい？」
「え？やっぱりちがうのかいギーシュ？」

そんな事を喋っていると現れました。
個人的死亡フラグ誘発ランキング5位のギーシュ・ド・グラモン！
極力係わり合いになりたくない人物なのだが、悲しいことにマリコルヌと仲良しさんらしく、女生徒を誑かしていないときはけっこうな高確率で僕らのほうにやってくるのだ。
ちなみに今日も薔薇をくわえています。
しかも微妙に似合ってます。
イケメンです…。
女の谷間に挟まれて溺死しろ！って感じです。
彼は舞踏会の最中タバサ嬢の近くにいたそうで、彼女が犯行に及んでいない事を知っているそうな。

「『永遠の友人』ってさ……なんか私とマリコルヌが死んでしまった後みたいだよな？」
「えぇ！？　僕死んでないよ？　ねぇ！ギムリ！　僕生きてるよね？」
「ごめんマリコルヌ……黙っていたんだけど実は……」
「えぇ～～～！！　そんなぁ！　嘘だよね？　嘘だと言ってよ！」
「うん。　嘘だよ」
「むふぉ～！　また騙されたよぉ」
「騙してなどいない！　欺(あざむ)いたのだ！」

「なお酷いよ！」

相変わらずの馬鹿漫才を繰り広げていたらギーシュは呆れたジト目で私達を見ていた事に気づいたので、放っておいてた事を謝罪した。

恥ずかしいね。

「いや、いいんだよ。　今日、実はギムリ少々頼みたい事があるんだが？」

「ん？なんだいギーシュ？」

「実は…例のあれをまた仕入れてくれないかい？」

「あ～アレですね？　旦那も好きですね～コノコノ」

「君は時々よくわからない事を言うよね」

「あ～ごめんな。つまりは了解ってことさ」

「助かるよギムリ。すっかり嵌(はま)ってしまってね」

「アレはいい物だ」とか呟きながら、うんうんと頷くギーシュ。

「ギムリ？なんのことだい？」

「あ～、歯磨き粉のことだよ」

「刃身我鬼粉？」

……絶句。

「ここスルーでいきますよー」

マリコルヌ君の愉快で素敵な解釈はともかく、このハルケギニアには歯磨き粉という代物が一切無い。

現代人の私としてはそこら辺思うところがあり、簡易的な歯磨き粉の作成に成功し、たまたまそれを使用しているところをギーシュ

に見られてしまい――

「キミの歯の白さと爽やかな口臭の秘密はこれだったのか！」と譲ってくれ、売ってくれと懇願され、歯磨き粉がすっかり気に入ったギーシュが他の生徒達に紹介したりしているのだ。

ギーシュ経由で女生徒にまわったりして、金髪縦ロールの女生徒が触発されたりしているらしいが、そこは割愛。

ちなみにもちろん御代はバッチリもらっている。

ちょっとしたお小遣い稼ぎみたいなものだ。

材料なんてそこら辺にはえてる薬草で代用できるため、元手がタダのぼっこい稼ぎである。

「へ～。だから君の近くからはなんか清涼な香りがするんだギムリ。今度、僕にも試させてよ」

「まいどぉ～」

「ギムリ…。君は、なんか商人みたいだね」

「ははは、そうだねギーシュ」

「「はっはっはっは」」

快活に笑うギーシュとマリコルヌ

「ほっといてくれ…どーせ貴族っぽくないよーだ」

私の近況はこんな感じです。

追記、実家から仕送りが届きました。
中身はアッシュモンド領で採れた大根でした。

「…いや、だから何よ？金は？」

強く生きようと誓いました。

無意図の惨状（前書き）

オリジナル魔法とかもありますんで、そこらへんは想像力豊かにお読み頂けると助かります。

無意図の惨状

「それじゃ、ミスタ？決闘の合図をお願いしますわ」
「よろしく…」

場所はヴェストリ広場にて、夕日は落ち、広場の芝生を夕闇が侵食しているように薄暗く静まりかえった夕刻。
私の面前には敵意を剥き出しの女生徒と、それを静かに、だが確かに怒りを目に宿した女生徒が向かい合い、私に決闘開始の開始はまだかまだかと催促していた。
一人はゲルマニアからの留学生『情熱のテェルプストー』ことキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。
もう一人はガリアからの留学生『ユキカゼ』タバサ改めシャルロット・エレーヌ・オルレアン。
さて、いったいどうして私はこんな状況に陥ってしまったのか…理由は至極単純！
私は授業後、ギーシュに頼まれていた歯磨き粉の材料を調達すべく学院から少し離れたアムーサの森に出掛けていた。
あらかた採集を終え、日も落ちそうなので学院に帰ってみると、ウェストリ広場前で件のタバサ嬢とキュルケ嬢を見かける。
原作キャラ達との遭遇に思わず進行方向を変更しようとする私。

「ちょっと？そこのいい肉体をしたミスタ？少し付き合って頂けないかしら？」
「決闘…見届け人…」

だがしかし、丁度いいところに来たと2人に連行される私。
断る勇気が無かったんじゃない！断われる空気じゃなかったんだ！

こんな私を誰が攻められようか…。

そして今に至る―

私は予期せぬ原作キャラとの接触に警戒したりタバサ嬢からチラチラと向けられる、さっさとしろはじめろや！的な視線やらで現実逃避を開始したい気分でいっぱいだった。

「それでは…私としては大変不本意ではありますが、私が決闘の立会い人を勤めさせて頂きます。両者、伝統に従い宣誓を…なんかもうめんどくさいから省略します…はじめ！」

やる気ゼロで振り上げた杖をぞんざいに振り落とし開始の合図をした。

「…なんか釈然としないけど、まぁいいわ！覚悟しなさいメガネ！ファイアー・ボール！」

「…エア・カッター」

っとなんだかんだグダグダに始まった決闘だが、二人の魔法の錬度はすごかった。

火のトライアングルであるキュルケ嬢の火系統魔法は、もはや火

炎魔法って呼べば？というほどの威力とスピードでタバサ嬢に向かって行く、しかしタバサ嬢は身体能力のみでそれを見事に見切り、即座にエア・カッターで反撃する。
タバサ嬢のエア・カッターは視界には移らないが、エア・カッターが通ったと思われる道呈は地面が日本刀で切り裂かれたかのような鋭意な軌跡を残す。
ハッキリ言おう！私のエア・カッターと比べると月とすっぽんだ！

「キャ！」

予想外の反撃に思わず女性らしい悲鳴を上げるキュルケ嬢。
彼女は衣服は破れ、薄い服からのぞく褐色の肌からは赤い血がにじみ出ていた。
これが北花壇騎士の実力かと目を見張っていると、キュルケ嬢はさすがにかなわないと悟ったか、即座に降参を宣言。

終わってみれば一瞬の試合であった。

その後、キュルケ嬢は「私が舞踏会で受けた風魔法はあなたの魔法よりよっぽど弱かったわ。疑ってごめんなさいね」とタバサ嬢を犯人と疑った事とタバサ嬢の大事にしていた本を焼失させた事を誠実に謝罪しタバサ嬢もそれを承認。
そして私に向き合い礼を述べた。

「ミスタもお付き合いしてくださってありがとう」
「感謝」

うん。基本的にいい子達なんだよね。お兄さんいい子は大好きです。
原作の主要キャラじゃなければもっと仲良くしていたかも知れな

いですね。

「いや、自分なんもしてないんで！仲直りできてよかったですね！ハハ」

「ふふ、ミスタったら。それじゃそろそろ、あちらで這い蹲って隠れてる方々にも登場してもらおうかしら？ファイアーボール」

「ウィンディ・アイシクル…」

「ほぇ？」

原作通りに仲直し、コレにて一件落着かと唸っていると、彼女達は茂みに隠れて様子を探っていたヴィリエ・ド・ロレーヌ一向をひきずりだした。

そういえばいたんだ…すっかり忘れてたし気づかなかった。

そして彼女達によるの彼女達のための彼女達による制裁の時間の始まりをつげた。

「あわわわぁぁ」

「わわわたしたちは関係ないわよ！」

「そそそうよ！これはミスタ・ロレーヌが言い出した事で…」

「ち！ちがうんだ！僕らはただたまたまここに居合わせただけで「問答無用！ファイアー・ボール！」

「「「キャー」」」

手始めにロレーヌの取り巻きの女生徒達を摂関！

タバサ嬢が放つ風魔法で腹黒嫉妬レディースチームの衣服を切りながら吹き飛ばし、キュルケ嬢の放ったファイヤー・ボールが残った衣服ごと丸焦げに、一瞬で腹黒嫉妬レディースは生まれたばかりの姿になった。

なんというコンビネーション……すいません。正直たまりません。オッフ！

そもそもこの事件は風系統の高名なメイジを輩出する家の出身で、自身も風系統のラインメイジのロレーヌが入学直後に自分よりも風の魔法を自在に操るタバサ嬢にプライドを傷付けられ、決闘を持ちかけるも返り討ちに遭った。それを根に持ち、キュルケ嬢に彼氏を取られた女子グループと共に下劣な復讐を企んだ…みたいな事件だったはずだ。

それを見て腰を抜かせながら顔を青くしているロレーヌ…まったく哀れな男である。

今にも漏らしそうなロレーヌを哀れみながら見ていると、不意にタバサ嬢が私のローブの袖をくいくいと引っ張ってきた。

「なんだいタバサ嬢？」

「あなたにも迷惑かけた……始末」

「「え？」」

思わず疑問符をあげる私とロレーヌ。

「あら？面白そうじゃない！ミスタ！乙女の心を弄んだその男に焼きをいれてくださいな？」

それはいい提案だと揺れる大きな双子山の前に両腕を組み同意するキュルケ嬢。

関係ないが、彼女の双子山はアニメで見るよりも、リアルでご立派でございます。

だがしかし…あえて言おう！

「なんでさー！？」

私が馬鹿な事を言っている間に会話の流れを聞いたロレーヌがな

ぜか顔色を戻し、鼻息荒くやる気まんまん状態になっていた！
キュルケ嬢はすっかり余興気分で私に黄色い声援をおくりはじめ、タバサ嬢すら『やってしまえ』と目で語るように私を見据える。
ロレーヌは自分のプライドを取り戻す千載一遇のチャンスとばかりに目をギラギラさせ私の全身を睨みつけるように観察していた。

「なかなかいい体をしているようだが、そんな平民の傭兵みたいな見かけだけの体…私の風の餌食になってもらうよ！エア・ハンマー！！」
「！！グハ！？」

惜しげもなく圧縮した空気の塊が急な事で動揺している私に鈍い音をたてて直撃した。
１５０キロで投げられたドッチボールが腹部に直撃したかのような衝撃を受け思わず膝を突きそうになる。

「どうだい？もうすぐトライアングルになる僕の風の腕前は！君がどこの誰で、君が何系統の魔法を使うか知らないが、今後の参考にしたまえ！」

舐めくさったようにロレーヌが挑発してくる。

なぜ？こんな状況なった？
どこで間違えた？
ギーシュから依頼を受けたから？―否
タバサ嬢とキュルケ嬢からの要請を断りきれなかったから？―否
ロレーヌとかいうこのクソガキが存在しているから？―正解！
私はとうとう我慢を辞めた――――

「くっくっく…
ハァーーーーハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」

「「「！！？」」」

突然壊れたかのように笑い出す私にキュルケ嬢タバサ嬢ロレーヌはそれぞれ疑問顔になる。
私はローブの懐から杖とナイフを取り出す。
腕輪はすでに装備済み準備は万端。

「ハハハ！いいぜ…やってやんよぉぉぉクソガキ！こっからはお勉強の時間だぁ！苦情や文句はあの世でのたまわれや！…レビテーション！」
「なななにを…うわぁ！」

私は満面の笑みで奴の四肢をレビテーションで浮かす。
急に浮き出し自由を失った体に戸惑うロレーヌ。

「始めこそテメーにとられたが安心しな！こっからはずっと俺のターンだ！いっくぜぇぇぇぇぇライトニング・ボール！」
「ブ！！」

ライトニングプラズマの劣化版ライトニング・ボール。ようはファイアーボールの雷版だ。それを４つ生成し、空中で身動きがとれないロレーヌの両手両足に狙いぶつける！
豚のような悲鳴をあげるロレーヌがあまりの痛さと理不尽さに降参を告げようとするが、俺の時間は終わらない！
私は杖を投げ捨て、声が発せられる前に全力で奴に向かって疾走する。

「メガトンパンチだオラ！！」
腕輪を媒介に風を纏わした強化したコブシで奴の鼻っ柱をぶん殴る！
そのまま腹部目掛けてアッパーカット少し浮き上がったところでさらに打ち上げるように掌底。即座に右足に風を纏わして右の上段蹴りを食らわせる。

「ブゲェ！」
衝撃で5メートルほどぶっ飛んでいくロレーヌ
あまりの惰弱さに舌打ちする。

「チッ！弱すぎんだよテメー！」
「ブホ…ぁぁぁぁぁ…なんなんだキミは！？降参だぁ降参するぅ！ごめんなさいぃぃぃ」

先ほどまで整った顔立ちは今は無く、奴の鼻はへこみ両手両足の衣服はボロボロに焼け焦げ
必死に涙を浮かべながら降参を懇願してきたが…無視！
派手に見えるが、私が使った魔法のひとつひとつはタバサ嬢どころかキュルケ嬢のファイアーボールに威力も速度も精度も届かない代物だ。
これでピーピー言ってたら今後生きていけねーよ！

「しょうがねぇ…最後だ！…フライ」
「ひぃ～～」

自分を上空に浮かせ、ロレーヌを見下ろす。

「集え我が作りし闇雲よ！架の者に雷の罰を与え給え・・・」

急速にロレーヌの周囲に空気が収束し、それが小規模ながら乱回転をはじめる。
そこに急激に冷やされた冷気が加わり、所どころでバチバチっと電気の火花が鳴り始める。
私がトライアングルになって初めて再現可能になった魔法を展開させる。

「プラズマ・・・・・・・・・サンダーーーーーーーーーーー（笑）」
「ギャーーーーーーーーーーー」

奴を覆っていた小規模な雲から激しい雷光が生まれ直撃する。
最後に一際大きな悲鳴をあげながらロレーヌは地に伏した。

「安心しろ手加減はしてやったから死にはしない……たぶん？」

そう最後にカッコよく締めくくると急に頭が冷えてきた。
辺りを見ればキュルケ嬢とタバサ嬢がポカンと口をあけていた…

はずい…
やらかした…
厨二全開だぁぁぁ…

ポカンと口をあけている女生徒2人。
あまりの恥ずかしさとやっちまった感にうなだれている私。
ころがっているロレーヌ。
実にシュールであった。
もういいや…帰ろう。

「あぁ～すいません2人方、そんじゃ私はお先に失礼しま～す。

あ！こいつらの後始末は好きにしてくださ～い」

俺は思考を放棄し、依然として呆然としている2人を背に帰宅した。

広場に残された2人と1人――

「ハッ！タバサだったかしら？えっと…何がどうなったの？」
「…理解不能」
「ミスタ！ってもういない！？」
「…ついさっき…帰った」
「そう…ねぇ、これからタバサって呼ぶわね？」
「…好きにすればいい」
「それじゃタバサ…コレ（ロレーヌ達）どうしましょう？」
「放置…どうでもよくなった…」
「それもそうね…ところでタバサ！あの刺激的なミスタはお知り合い？」
「…同じクラス…授業で1度見た…あとは知らない」
「そう…じゃあ明日から忙しくなるわねぇー！」
「…悪趣味」

とそんな会話があったそうな。
ちなみに、その頃会話の中心人物は―

「ぬぉぉおおお！恥ずぃぃぃぃぃ！
いやだ～～～！絶対にタバサ嬢に目つけられた～～～！
暗殺されるんだぁぁぁ～！わぎゃゃ～～～～～～！ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！」

自分にサイレントをかけ、ひたすら奇声をあげて自分の行動を死ぬほど後悔していた。

無意図の惨状（後書き）

メガトンパンチ…まぁ単純に風の力を利用して威力を上げただけのなんちゃってパンチですｗそれでも威力はそれなりにあると思いますよ！

音楽で話そう

キュルケ嬢とタバサ嬢との決闘騒ぎから、数日が経ち学院の生徒も落ち着きを取り戻したかのような今日この頃、私、ギムリ・ド・アッシュモンドは授業をサボタージュし、ギターを片手にアムーサの森に来ていた。

別に薬草の収集に来た訳では無く、世の無常を感じて、無性に発散したい気分になったのだ。

思えばロレーヌを決闘という名のフルボッコタイムの翌日から、私はいつものごとく教室の隅で大人しくしていようと思った矢先、どこからともなく現れたキュルケ嬢が「はぁ～いミスタ。昨日は熱い夜だったわね。お元気ぃ？」などと、朝っぱらから艶かしい声で挨拶をかましてくれたあげく、事あるごとに異様に私に着きまとっくるようになったり、友人を介して私の事を色々聞きだそうとしてきたのだ。

まさに想定外の事態である。

おかげで毎日が2人限定学内かくれんぼ大会である。

しっか～し！ストレスの原因はそれだけでは無い。

キュルケ嬢をなんとか撒き、ひとり落ち着いて昼食なんぞを！と思ったら妙に視線を感じ、周りを探ると、そこにはタバサ嬢が今まで読んでいたであろう本から目を離し、私をジっと見つめているではないか！

「オーーーマイキーーー！！」

ＯＴＺ

完全に目をつけられたと思っていいだろう。

さらに彼女は読んでいた本を閉じ、ソロソロと私に近づいてくるではないか！

これはまずい！と私はそそくさとその場を退散。
そんなことが頻繁に起こる、それでもめげずに毎度の如く即離脱である。
失礼な事は百も承知！
だが肝心なのは彼女達原作キャラとの円滑な人間関係では無く…
私の命である！

こんな時間を毎日過ごしている私。たまにはひとりで、ここ最近溜まりに溜まったストレスを発散したいと思うのは不自然な事ではない。
これでも私は前世の頃は高校時代から友人達とバンドを組み、文化祭などでそれなりに活躍していたためギターの実力には自信がある。
まぁギターがうまくてもこのハルケギニアの大地では一切役にたたないのだが、そこは趣味もしくは心の安らぎという部分で許して欲しい。
始祖たるブリミルさんも笑って許してくださるだろう。

「あぁ～あぁ～あぁぁぁ～♪」

〈ジャンジャンジャーン〉

どうでもいいが、このギターは私が錬金した特別製のギターである。

森、川、豊かな自然とくれば定番ではフォークギターだが、私は前世の頃からもっぱらエレキ派である。

〈キュウイーーーン♪ジャガジャガー〉

このギター、学院にきてから作ったものであるのだが、作成の際に『錬金』でちょくちょく内部を弄っており魔法で電流を流し、発した音を風の魔法で振動させるという『なんちゃって魔法式エレキギター』なマジックアイテムである。

私は世間的に必要無い現代技術の応用にはつくづく才があると思う。将来は貴族なんぞやってるより、しがない平民向け音楽楽器専門店でも開いたほうがいいのでは？っと思う自分を許してやってほしい。

ちなみに私がどうしてわざわざこんな森の中までやってきたか？

この『なんちゃって魔法式エレキギター』実はけっこうな音量がでるのだ。

学院内で弾いたら即没収間違いなしの迷惑楽器である。

サイレントの魔法を使わず思いっきり歌い時はこうして森にきて演奏するようにしている。

ん？

主人公が森で演奏していると自然と動物達が寄ってきて幻想的な光景になったり？

そんな夢みたいな事があるわけがないでしょう。

むしろ大音量に警戒して動物達は逃げ去っていくさ。

迷惑と言えば最近深夜になると途轍もない破壊音がちょくちょく聞かれるようになった。

あの破壊音は私の予想では間違いなくルイズ嬢の魔法によるものだろう。

深夜に急に爆発音が聞こえたときは、空襲か？っと驚き勇んでベッドの下にもぐりこんだのはいい思い出だ。
ちなみに幸いな事にルイズ嬢との接点は一切無い。
たまに我が友人マリコルヌ君が公爵令嬢が魔法のひとつも使えないなんてと笑い話をしてくれるくらいだ。
一度、遠目で彼女の爆発魔法を見る機会があったが、ハッキリ言って凄まじいの一言である。学院の教師や生徒はなぜ彼女の魔法の特異性に気づかないのか不思議でしょうがない。
まぁ、それがこの世界の常識にのっとった考え方なのだから仕方無いと云えば仕方無いが。
彼女と彼女が来年召還するであろうサイト少年との接点が生涯無い事を祈るばかりである。
それでも、毎晩休むこと無くルイズ嬢が必死に魔法の練習しているのを思うと悲しい気持ちになる。
勿論それでも何もしないのだが。
前述の通り、大事なのは私の命である。
そんな今日この頃である。

「次は何を歌おうか…」

私の現実逃避は始まったばかりだ。

その頃魔法学院のテラスにて―

「タバサ、例のミスタ見なかった？」

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーはある1人の少年を探していた。

彼女と共にいるのはつい先々日から友人になったタバサ。

タバサはキュルケからの問いにふるふると首を横に動かすことで応答する。

予断だが、ロレーヌ達一行はその後彼女達の通報により舞踏会での愚行が明るみに出たため、数週間の停学処分になっていた。

この程度の処分で落ち着いたのは、決闘の審判を勤めたギムリ・ド・アッシュモンドによってすでに処罰は受けていると教師陣にキュルケが説明し、その上でロレーヌ達の怪我は必要な処罰だったとキュルケが念を押し、教師人も納得したからである。

怪我の影響で回復薬を使用しても、数日は体を休めないといけないほどの重症であったロレーヌはどちらにせよ自室で休養をとらざる得なかったのだが。

「そう。本当に不思議な方よね？あんな魅力的な紳士がこんな国にいるなんて今までぜんぜん気づかなかったわ。タバサも彼を探しているのでしょう？」

「2つ以上の魔法を同時に行使をしてた…」

それもあるのよねぇっと相槌を打つキュルケ。

キュルケは一重に彼の決闘時の姿に彼女の『情熱』に火がつき。

タバサは彼のもつ魔法技術に興味が沸いていた。

2人は件の少年、ギムリ・ド・アッシュモンドを探していた。

ギムリ・ド・アッシュモンドがあの時見せた3つの魔法、威力や

効率という部分では風のトライアングルであるタバサ自身の魔法の一つ一つよりは拙いが、魔法の複数同時行使、風の魔法を身体に纏わせ威力をあげるという、既存の戦闘では見たことも無い戦闘技術、先日、タバサが図書館より借りた『風の魔法の応用技術書』にも載っていなかった魔法をどう身につけたのかという点に純粋に興味が沸き、元来魔法技術を応用させる事が好きなタバサの心根を刺激していた。

「そうね。それにあの男らしい見事な肉体♪『情熱のツェルプストー』の名にかけて私の虜にしてあげるわ！」

「ただのメイジはあそこまで鍛えない…」

タバサは自分が発したその言葉に、ふと考える。

そう、ただのメイジがあそこまで身体を鍛える必要があったのだろうか？

ギムリ・ド・アッシュモンドの肉体は明らかに戦闘を想定しての筋肉だった。

自分も同じく戦闘を想定して訓練しているからこそわかる。

そこで気づく、もしや彼は私とよく似た環境、つまり戦闘をせざるえない境遇にあった人物ではないのだろうかと…

「ギムリ・ド・アッシュモンド…」

思わずぽつりと呟くタバサにキュルケは、これは珍しいと破顔する。つい最近友人なったばかりだが、ここ数日で彼女はそこまで他人に興味を示すような人物では無いと感じていた。

そこがまたキュルケのもつ母性に触れたわけだが…

「あら、タバサも彼を狙ってるの？じゃあ恋のライバルじゃない」

「それは無い…」

タバサはタバサで、つい先日友人になったばかりのこの褐色肌の友人は、どこまで頭がピンク色でいっぱいのなのだろう、とため息をついた時、テラスに薔薇を加えた金髪の少年と蒼髪小太りの少年がやってきた。

丁度いいとばかしに、キュルケはギーシュとマリコルヌにミスタ・ギムリがどこにいるのか知らないかと聞いてみたが今日は朝早くからどこかへ出掛けて行ったと言われ落胆した。

そこでキュルケはミスタ・ギムリはどういった人物なのかを彼と親しそうな2人に聞いてみた。

「君達ほどの麗しき女性が関心をよせるなんて、意外に罪作りなんだな彼は」

「でもさギーシュ？ギムリってそんな目立つような男かい？」

「ん～そう言われると難しいな、確かにいい肉体してるし、友人としては頼りがいのある人物だが…どうして彼の事を？」

どうして、ギムリに関心を寄せるのかを聞く2人に、キュルケは先日決闘騒ぎの顛末を話そうとしたが、タバサがそれを遮る様に杖をキュルケの口の前に振りかざし、話さないようにし、キュルケもそんなタバサの意図を読み取り、いい体をしているから私の『微熱』が反応しただけよっと誤魔化し、その場を後にした。

「なぁギーシュ、気にならない？」

２人がテラスから消え去った後、おやつのケーキをほおばりながらマリコルヌはギーシュに問いかけた。

「ん？なにが事だいマリコルヌ？」

「あの２人の事さ、何か誤魔化してるみたいだったじゃないか」

「言われてみればそうだねぇ。我が友人ギムリについてだったね」

「これは何かあるね」

「ふふ、面白そうじゃないか。丁度退屈していた所だ。退屈は心の病気の元だかね」

「さっすがギーシュ！ギムリが帰ってきたら色々聞き出さなきゃね！」

「『青銅』のギーシュの名にかけて彼女達がなぜ我が友人ギムリが気になるのか、明かさねばならないね」

こうして狂った運命の歯車はどんどんギムリの思惑から加速するようにずれていくのであった。

音楽で話そう（後書き）

感想をくださった皆様。
たいへんありがとうございます＞＜

これからもがんばりますので、応援よろしくお願いします。

財布事情の夜明け（前書き）

今回は深刻なお金のお話です。

財布事情の夜明け

「ダ～リ～ン♪待って～♪」
「今日こそは逃がさないぞ我が友ギムリよ～～～」
「ぜぇぜぇ…待って…ギ…ム…リィ～～…ぜぇぜぇ」

なぜこうなってしまったんだろう？
この学院に着てからそればっかりだ。
だが、なんだこの状況は？

あまりに理不尽かつヤリきれない思いでいっぱいになりながら私は今日も授業が終わり次第早急に自室まで全速全開でひた走る！
後ろから追いかけてくるのは、例の如くキュルケ嬢だ。だがなぜか今ではそれにギーシュやマリコルヌまでついてくる。
あとマリコルヌ！死にそうだって！誰かとめてやれって！汗が噴き出してマリコルヌが通った後に水溜りできってから！！！

なんとか自室まで逃げ延び、即座にドアに『ロック』の重ねガケ。
さらに自分で取り付けた金属製の鍵を閉める！
一応この学院はアンロックの魔法は使用禁止のはずなのだが、キュルケ嬢にそんなルールは関係無いないとばかしにあっさり解除してくる、先日、突然部屋に強襲され、驚いて窓から逃げ出した事がある経験からドア鍵を備え付けるようにしている。

「ふぅ～。今日もなんとか逃げ延びた…」

先日、なぜかギーシュやマリコルヌが私にキュルケ嬢達と何があったのかを聞き出そうとしてきて、それを誤魔化し続けていたら、とうとう痺れを切らした彼等が実力行使にまで、でてきてくる始末だ。

朝起きる。
ドアを開けるとそこにはギーシュが待ち伏せ。
急いでドアを閉め、窓から学院に登校する。
授業開始前に教室いるとキュルケ嬢の強襲に会う為、時間ギリギリまで粘り授業開始と共に入室。
お昼休憩に食堂に行く。
ここで登場マリコルヌ！
我が食堂は通さんとばかりに通せんぼ。
なんでも、食堂に入りたければしっかりと事情聴取を受けろ。だそうだ。
おかげでここ数日はろくに昼食にありつけていない。
午後の授業まで時間があるため図書館へ行こうとすると、毎日の如く、そこには青い髪の少女の姿が…ｏｒｚ
結局午後の授業も実習の時以外は午前と変わらぬ感じで、授業が終わると同時に風の魔法で高速移動しながら退出。
今に至る。

「それでも私はやっていな～～～～い！！！」

思わず叫んでしまうが、部屋には常時サイレントをかけている為に響かず無音…
思わずネタに走る自分が虚しくなった。

この際、洗いざらいすべて話してしまいたくなるが、ここで自分

がメインキャラの仲間入りをしてしまうと、後に引けなくなる。
今は我慢の時期なのだ！そのうちこの騒ぎも止むさと前向きに考える。
実はここ最近の鬼ごっこも危惧すべき問題なのだが、さらなる問題がここに来て発生しているのだ。

それはずばり金である！

マニーだ！！いや別に言い直す必要は無いのだが、とりあえず金欠なのである。
貴族の生活は金がかかるのは当然なのだが、ここら一体の物価がべらぼうに高いのだ！
石鹸や衣服に学院のメイドさんへのチップなど、生活にかかる金がとうとう尽きたのである。
親からの仕送り？期待するだけ無駄である。
この前、仕送りしてくださいと手紙を書いたら、1枚の封筒に、これで頑張りなさいとだけ書かれた手紙と5エキューが返ってきた。
父よ母よ…5エキューでどうしろと？学院のメイドでもそれ以上に稼いでいますぞ？
今までは足りない分をギーシュ経由で歯磨き粉を売って過ごしていたが、最近はそれもできる状況にない。
この学院に通っている貴族の子供たちは基本的に家族からの仕送りで普段の生活を賄っている。
学院での貴族の出費は1ヶ月に５００～１５００エキュー程となっている。
私の場合定期的な仕送り０エキュー。
歯磨き粉等を売って自分で稼いだお金２００～４００エキュー。
ただでさえ最底辺の生活をしている私に唯一の収入源が無くなるのである。
どうしたもんか～～っとベッドの上でゴロゴロ唸っていると、壁

に立てかけられた一本のギターが目に入った。
「この手があった〜〜〜〜！」
明日は幸い虚無の曜日で学院は休日である。私は急いで明日に向けての準備を開始した。

翌日、時刻はお昼時に私はトリステイン首都トリスタニアに来ていた。
服装は平民用の安い布地のものを纏い。
片手には愛用のなんちゃって魔法式エレキギター。
ちなみにこのギターを『エルヴィス』と勝手に名づけた。

私がなにをするか？
それはもうおわかりだろう
つまりストリートライブを行うのだ！
元手ゼロ。
使用するのは技術と自分の歌声のみ！
信じられるのは己のみ！
大通りでいきなり演奏するのはさすがに気が引けるため、大通りを外れた、ほどほどに人通りの良い道にあるちょっとした広場を選んだ。

見慣れない物を担いだ私に道を行き交う人々は大道芸でもやるのだろうかと物珍しさ交じりに私を取り囲んでいた。

「お集まりの皆様、本日はお日柄も良く。絶好の休日日和でございます。なれば、一時のお楽しみもまた重畳、私の奏でるロンドに少しでも心揺れたお方は少しばかりのお気持ちをこの箱に中にいれていただければと思う次第であります。それでは1曲目『フラワー～ハルゲニアｖｅｒ～』」

〈ジャーンジャーンジャジャジャーン♪〉

「ら～んら～らん～らー♪」

聞きなれない楽音に聞いたことも無いようなテンポとリズムで歌われる曲に、行き交う人々は一人また一人と足を止めていく。

私は1曲目はできるだけ多くの客を弾きつけるため、陽気な、休日にピッタリなポップ調が効いた曲を演奏した。

――ギターのリズムにノセて声を腹から絞り出すように吐き出す。

そして言葉を紡ぐ

紡ぎだした言葉が空気を解して広がっていった――――

基本的にハルケギニアの音楽といえば、歌声中心のオペラのようなモノが基盤となっている為このような明るくリズミカルな音楽は珍しい。

ちなみに元曲は前世で聴いていた曲をハルケギニアの言葉に訳したりして、それなりにオリジナルも込めたものだ。

このハルケギニアの大地では基本的にハルケギニア語に統一されているが地方や国よっては、けっこうな訛りやスラングがある。

これが、差別なりにも繋がったりするのだが、私は訛りやスラン

グもどこと無くカッコイイものがあると思い、演奏する曲に混ぜたりとアレンジしたりするのが好きである。

――田舎くさい？いいじゃないか、牧歌的って言い換えればさ――

1曲目を歌い終わると周囲には5人ほどのギャラリーがいた。
その客の一人、平民風のダンディーなおじさんが歌い終わって礼をした後に話しかけてきた。

「おい兄ちゃん！珍しい歌だな？どこの曲だい？」
「はい。私の遠いふるさとの曲でございます」

嘘は言っていないですよ？

「ほう～なかなかいい歌だな！もっと歌ってくれよ！」

一度、味をしめてもらえばこちらのものだ。
次曲のターゲットは道行くアベック……って言い方は古いか、カップル達。

「はい！畏まりまして。曲名……『小さな恋のうた』」

〈ジャガジャーン！トゥントゥントゥルーン♪〉

――軽快な弦波長を響かせていると、
自分だって楽しくなってくるから音楽は不思議だ――

2曲目3曲目と歌っていく。
ギャラリーも次々入れ替わるように流れては入ってくる。

ギャラリーの中には、
「こんな歌はないか？」
「私達みたいなカップルにおススメなのを！」
「こういう曲をを歌って欲しいの！」
「さっきの唄もう一度頼むぜ！」
とリクエストがでてきたりと結局歌い疲れる頃には計２０曲以上も熱唱し、ギャラリー達も１曲が終わるたび満足気に私が用意した集金箱にお金を入れてくれるようになった。

気がつくと時刻は夕方になり、広場に集まったギャラリーの数も３０人を越えるほどとになっていた。
時間も遅くなってきた為最後の曲を終えありがとうございましたとお辞儀をすると大勢のギャラリーがたくさんの拍手をくれた。なかにはまた来週もこいよ！っと言ってくれる人もいたりした。

ギムリ…感無量である。

集金箱を覗いてみると今日１日で５エキューは確実に入っていた。
これで明日からまた頑張れると涙を流しながら喜んでいると、先ほどまでいた客の一人が話しかけてきた。
「今日は良かったぜ？どの唄も聴いたこと無い唄ばっかだったが、楽しめたぞ」
よく見れば、はじめに話しかけてきてくれたおじさんだった。
最初から最後まで付き合ってくれたのかと感謝を述べるとおじさんは、顎を手で撫でながら

「おい坊主、俺はバリウスっちゅーもんなんだがな？お前さん。よければウチの店で歌わないか？」
と驚く事を言ってくれた。

話を聞くと、このいかにもダンディーなおじさんは此処トリスタニアで酒場を開いているそうだが、最近客の入りが悪いという。
そこで客寄せに私が演奏をしてくれないかという話だった。
もちろん客の入りに応じた給料を払うしチップも好きなだけ自分のものにしていいとの事。
こんな話、普段の私なら派手な事はしたくないと断るだろうがストリートライブで興奮していた私は２つ返事で了承してしまった。
結局、学院とのバランスも考え、月に３・４回虚無の日におじさんの経営する酒場『バリウスの酒場亭』で演奏する事に。

これがトリスタニアにひとりのシンガーが誕生した瞬間だった。

財布事情の夜明け（後書き）

意味深っぽく締めてみました。
不幸の後にはキチンと幸福を与えるのが私のやり方です。
もちろんその逆もしかりですが…二ヤり
そいえば今回の内容ゼロ魔なのに魔法関係ないですねｗｗｗ

不思議な国のアッシュモンド領（前書き）

今回は主人公が非常に饒舌ですw

不思議な国のアッシュモンド領

まさかの酒場デビューが決まった私は、このハルケギニアの大地に転生してから初めてじゃないかと思われる幸運に気分を良くし、鼻歌交じりに上機嫌で岐路についた。

まだ少し肌寒さが残り、馬上から感じられる風がやけに気持ちよく感じる。

さて学院についたものの、辺りはすでに暗く、寝ている生徒もいるあろうから極力物音を立てないよう心がけながら自分の部屋に入ることにした。

今日は本当に良い1日だった。まだあのライブの高揚感が忘れられない。

「ふぅ～、今日は充実した1日だった～」

自分の部屋に帰ってくるなり思わずこんなセリフをこぼす。

「それはよかったわねダーリン♪」

「やっと帰ってきたのかい？」

「おかえりギムリィ～僕もうお腹すいたよ～」

「おうともさ～！お出迎えご苦労さん」

曲に合わせて手拍子をしてくれるギャラリーとの一体感

自分の歌で喜んでくれる人がいるという嬉しさ

これですよ！コレ！これこそが音楽の力です！

とまぁ興奮冷めやらぬ中、部屋の明かりをつけ、寝巻きに着替えようと…

アレ？

「おかえりなさ～いダーリン♪」

「「やぁ！」」

明かりをつける。

するとそこには月明かりを背景に艶やかな微笑をさらすキュルケ嬢とおそかったじゃないかと軽やかに手を上げるギーシュとマリコリヌの姿が…。

思わず部屋から出ようとする私。

しかしキュルケ嬢が逃がすまいと、どこからか取り出した縄で私の体は一瞬にして蓑巻きに。

ＯＨＨＨ！ジーザス！！

なんてベタな展開ですか！

なんで気づかなかった私…ｏｒｚ

「ふ、とうとう追い詰めたよ我が友よ」

「あ～ん、この『微熱』から毎度毎度そうそうに逃げられると思って？」

「君が帰ってこないからずっと待ってたんだよギムリィ～」

「私がいったい何をしたって言うんだ！　誰か！　誰か弁護士を呼べ～」

思わず嘆き懇願した私を誰が攻められようか。

もう無茶苦茶ですよ、この人達…。

無断で人の部屋に入るのは禁止されてるはずなんだけど。

聞けば彼ら、虚無の曜日である今日こそ私を問い詰めようとしたのだが、肝心の私がすでに外出済みで、仕方なく私の部屋で晩酌を

しながら私の帰りを待っていたそうな。

「どんだけ暇人なんだ貴族ってのわぁ～～！！」

「ギムリィ～きみもその貴族だよぉ？」

「ふ、そもそも君が逃げるのがいけないのだよ」

蓑巻きになった私を４人掛けのテーブルにつかせると、ギーシュとマリコルヌはやれやれといった表情で私に手を肩まであげる。

キュルケ嬢は私の胸をつついたりしてご満悦なご様子。

「いや、キュルケ嬢はともかくなんで君達までいるのさ？」

なんでも彼らはキュルケ嬢とタバサ嬢が私に興味を持った事に疑問を持ってそれを私に問い詰めようとしたのはいいものの、途中からそんな疑問より、あらゆる手段を使ってそそくさと逃げる私を追いかける事のほうが面白くなってきて、なんとなく追いかけ続けて今日に至るらしい…ってなんか悲しくなってきた。

大丈夫でしょうかこの国の未来は？

「私としてはダーリンとあの晩のような熱い夜を過ごせればそれでいいのだけれど、

タバサもそこの２人もあなたに興味あるみたいだし、ごめんねダーリン」

謝るくらいならそっとしておいて欲しかったんだぜ。

ちなみにタバサ嬢は虚無の曜日は基本的に自室に篭もっていて出てこないそうな。

それに気をきかしたキュルケ嬢がタバサ嬢のぶんまで私の事をききにきたという事だったのだが…。

〈コンコン〉
「あらタバサ？結局来たのね？」
「…帰ってくるのが見えた」

突然ドアをノックする音が聞こえたと思ったら、ミス・タバサ嬢が本を片手にピョコリとやってきた。
そして部屋の隅から椅子も持ち出し、勝手に席について私に、さぁキリキリ吐けやコラっと熱い視線を送ってくる。
ドキドキなんてしないですよ？
……ほんとですよ？

「なんでこんなことに…」

もう何度このセリフを唱えた事か…
そう言って俯く私にマリコルヌはそっと私の肩に手をあてて
「ギムリィ～前に君が、『この世界はこんなはずじゃなかった事でいっぱいなのさ』と言っていてじゃないか。あきらめなよ」
「あらダーリンったら『世界』なんて意外とスケールの大きな事をいうのね～」
「ふ、随分と悲しい事をいうじゃないか我が友ギムリ」
「…真理」

我が最初の友人マリコルヌよ…本当にその通りだよ！

って！ちょっと！タバサ嬢！？
目が遠い所を見てるよ？
え！何！？その、私にはわかるよ的な目は！
いやいや！私きみほど辛い人生おくってないですって！

ガリア王ジョゼフの娘であるイザベラ王女の下、北花壇騎士団として危険な任務ばかりを続けさせられているタバサ嬢には、この言葉は胸をうつものあるのだろう。
すまないタバサ嬢。
あと1年ちょっとしたらルイズ嬢の使い魔くんがなんとかしてくれるかさ！
それまでがんばるんだよ？

「ゴホン！っで我が友ギムリ？先ほどミス・キュルケから詳しい話を聞いたところなんだ、君がミスタ・ロレーヌを打ち負かすほどのメイジだったとは、と驚いていたのだが、それを聞いてさらに色々聞きたい事があるのだよ」
「そうだよギムリィ～！キュルケの話だと複数の魔法を同時に行使したらしいじゃないか？正直信じられないよ」
っと、いきなり確信をついてくるギーシュ。

原作通りどこまでも馬鹿でいてくれればいいものを、やけに利己的じゃないか。
そしてキュルケ嬢？そのことはタバサ嬢が口止めしてくれてるんじゃ？
何？その、話ちゃってごめんね～ってポーズは！
タバサ嬢もちょっと呆れてるよ？

「あら？でも嘘はついてないわよ！それに見たことも無い野生的で刺激的な闘い方をしていたもの！忘れるはず無いじゃない～♪」

その言葉にタバサ嬢もコクリと頷く。

「え～っと、それは2人の見間違いじゃないかな？ほら！あの時はもう夜遅くて視界が悪かったし「…誤魔化さない」ハイ！キリキリ

お話したいと思いますです！ハイ！」

誤魔化そうとするが、急にタバサ嬢が先ほどまでの表情が嘘のようにキリっと引き締まり、有無を言わさず杖で遮った。

私はそろそろ諦めの境地に立ちそうな思いです。

これ以上しつこく詰め寄られても私の精神衛生上好ましくないので、仕方なく絶対に公言しないと約束させて話すことにした。

――――ハハハ、コレたぶん運命の岐路ってやつですよ、

やってやろうじゃ無いか。

一世一代の名演技を見せてやんよ――――

「それじゃあ、みんなはアッシュモンド領についてどれくらい知ってる？」

優しく囁く様に静かに尋ね始める。

「ん？ダーリンのご実家よね？正直、あんまり聞いたことがないわね。

聞いたことあるタバサ？」

「…情報が少ない」

「ふ、そうだね。トリステイン南東のにあるってくらいのイメージしかないね」

「僕も田舎だな～って事ぐらいしか知らないよ？」

「そう！そこなんだ！」

今までの静かな口調から一転。

〈ドン〉机を叩き音をたてて立ちあがる私に４人は驚かせる。

「「「「「！？？」」」」」

そして私は切々と語りだす。
古来よりアッシュモンド領は他の領より自然が豊富で人間の数も少ない。
そのため我が領には多くの動植物が生息している。
そしてその中には王国騎士団級のメイジが１０人掛かりでも相手をしてもしきれない程の危険な魔獣まで存在するのだと。
我が祖先は昔からそんな危険な魔獣と隣り合わせで生活してきた。
勿論、王宮に相談し、王国騎士達が魔獣の討伐に援軍してくれた事もあったらしい。
だが、その騎士達をもってしても魔獣の群れは倒せず、騎士達は全滅した。
当時の王宮はこの事実に驚くと共に、この件を隠す事にした。

なぜか？

それは誇りあるトリステインの騎士達が全滅したなどとあっては、トリステイン王国の恥でしかないからだ。
そして王宮は今後、アッシュモンド領には一切、兵を派遣しない事を決定した。
よってアッシュモンド家の祖先達は自力でこの事態を乗り切るしかなかった。
そして凶悪な魔獣に対抗するためアッシュモンド家には他家の者には決して伝えられない無い秘伝の技がいくつか生まれた。
しかし、その技を生み出す過程で多くの祖先達が血を流してきた。

今でこそ、祖先のたゆまぬ努力によって少しばかりの安全があるが、それでもまだ危険な魔獣は存在するだ。
だから、アッシュモンド家に生まれた者は例外無くその技の訓練を幼少のみぎりより受けている。
その技を受け継ぐには並大抵の身体と精神力では受け継ぐ事はできない。
だから私は魔法だけでなく、体も鍛えているだと。
そしてその技のいくつかは、公になってしまうと研究所行きは確実なほどの秘伝が存在する。
しかしそれでは私達アッシュモンドの者は祖先の流れた血に報いる事ができない、だから絶対秘密にしてほしいと。

これを聞くと4人は先ほどまでの空気を一新させ、真剣な表情で黙り込み、すまない事を言わせたね。と真摯に受け止めるのだった。

「ダーリン…」
「ブルブル…アッシュモンド領がそんな危険な地だったとはね…」
「僕、絶対に君の領へは近づかないよ！」
「……」

ギーシュとマリコルヌなんて顔を真っ青にして震えている。
タバサ嬢も秘伝なら仕方無いとばかしに肩を落としているのが見て取れる。
すまない原作4人衆よ。
まったくもって嘘八百である。
アッシュモンド領はたしかに自然が豊富な山岳地帯ではあるが、

基本的に平和な農村である。
魔獣もたまにでるが、人を見るとささっと逃げてしまうため戦闘になる事なんて数年に1度あるか無いかの、平凡な田舎領である。
そんな田舎の農村領にお金が無いのがわかっているため盗賊なんて出ないし、魔獣も出ないのだから王宮が騎士団なんて派遣する必要もない。
これが王宮が兵を派遣しない理由である。

「なるほど、そういう事だったのか、すまない我が友ギムリよ。そんな話しづらい事をわざわざ話てもらって。僕が間違っていたよ」
「いいさ、少なくとも4人は心にしまっておいてくれるだろう？信用してるし信頼してるからさ」
「ふふ、君にそこまで言われたら貴族としてその期待に答えねばならないね」
「わかったよギムリィ～絶対に誰にも言わないよ！」
「ダーリンと秘密の共有なんて素敵じゃない」
「約束する」

そういって頷きあう4人。
あまりに素直に聞いてくれる純粋な心を持った4人に私の心が泣いた。
なぜ嘘をつく必要があるのか？
下手にマルチタスク（分割思考）とかタバサ嬢に教える事になったら、いざとなった時の危険度がさらに跳ね上がるじゃないか！
そんな訳で、我が身大事に先祖の歴史を捏造してしまった。
顔も知らぬご先祖様…どうもすいません。
哀れな子孫を笑ってやってください。

「さぁ、せっかくだから飲みなおそうじゃないか！」

「ふふ、そうね！タバサも付き合うでしょ？」
「…今日だけ」
「何かおつまみはないのぉ？」
「それではグラスを持って～」
「「「「「カンパーイ」」」」」

私も嘘をついてしまった背徳感から今日くらいは仕方無いと腹をくくり、その晩は5人で朝まで飲み明かした。

「ところで、ダーリンってもしかして、かなり強いんじゃないの？」
「ん？そんな事ないさ。この前はロレーヌが油断してたから勝てたけど、トライアングルって言ってもラインに毛が生えた程度だし、キュルケ嬢やタバサ嬢と戦えば即殺される自信があるね！だからもしもの時は即効逃げるのさ！」
「誉れある貴族たる者が、自分の事をそこまで言うかな…我が友ギムリは強いのか弱いのか本当にわからなくなってきたよ」
「そうねダーリン、ちょっと情けないわよ」
「彼の魔法は変則的……どこか粗野」
「ふふ、辛らつだねミス・タバサ」
「…事実」

「だから私の事はほっといてくれよ…」

P.S

父上、母上。

あなた方が知らないうちに、彼らの中でアッシュモンド家は人外魔境の地になってしまいました。

反省はしません。後悔もしません。

不思議な国のアッシュモンド領（後書き）

ゼロの使い魔の主人公サイドの人達って本当に素直だな～っと原作を読んでいて思っていました。
これは…感想を聞くのが怖いです。
ある意味原作キャラの冒涜ですよねw
原作ファンの皆様申し訳ありません。
原作キャラを騙してしまいました＞＜

っとまぁ本編ではギムリ少年は自称弱いとか書いてますが、設定ではそこまで弱くは無いというネタバレw
実戦経験こそないですが、オーク鬼くらいならネタ魔法（笑）であっさり倒す事ぐらいはできます。
じゃあ対人はどうなんだ？
勝負は時の運ですからどうなんでしょうね。
油断しなければギーシュ級なら倒せるでしょうが…。

今回はこの編で！それではまた次回もお読みいただければまたお会いしましょう。
それでは。

無意図の惨状２（前章）（前書き）

今回と次回は前章・後章として構成する予定です

無意図の惨状2（前章）

トリステイン王国トリスタニアの平民街にあるバリウスの酒場亭にて―

灰色のレンガに分厚く作られた外壁
お世辞にも綺麗な酒場とは言えない、
ムードをだしていると云えば聞こえはいいが、照明は数少ない蝋燭が情け程度にさしているだけ。

〈ジャンジャーン〉
〈ドゥーンドドゥーン〉
〈タンタン〉

活気の無い平民街の中でも特に活気の無さそうな雰囲気のその店には、今日も明らかに場違いな軽快な音が漏れ出していた。

「ヨシュア～さっきのとこもうちょい早くな～！ディジーはそのままよろしく～」
「了解っス！」
「あいよぉ～」

私が『バリウスの酒場亭』で歌い始めてから3ヶ月たった。
客入りのほうは、ボチボチ順調のようで、若い平民の中には毎週通ってくれるような固定客も出来た。
ここ最近の変化と言えば、私はバンドを組むようになっていた。
メンバーはバリウスさんの息子のヨシュアがベースを、その幼馴染のぽっちゃりした体格で男っ気の強いディジーがドラムを担当して

いる。

ちなみにヨシュアは短めの金髪をオールバックにしていて、見た目は最早田舎のヤンキー風で幼い頃からヤンチャ気味の性格からか、ここら一帯の若者のリーダー的存在らしい。

デイジーはそんなヨシュアを口悪くも常に気にかけていて、どちらかと言えばデイジーのほうがリーダー気質では？っと思っていたりもするのだが、当人同士の問題なので割愛。

いつの時代もどんな世界もやはり女は強いのだ。

そもそもなぜ2人とバンドを組むようになったのかと云うと、私がバリウス亭で歌い始めて数週間が経った頃、突然バリウスさんに「息子がオマエさんの音楽に興味持ってるらしいんだが教えてやってくんねーか？」っと言われ、特に断る理由も無いのでいざ会ってみればＴＨＥ酒場の息子！と云った感じのワイルド風の青年がニヤリとやってきた。

ヨシュア自身、私の事より私が演奏する歌や、楽器に興味が沸いていたそうでずっと話かける機会を伺っていたそうな。

若者は新しいモノや目新しいモノが、とかく好きなものである。

それにヨシュアの幼馴染のデイジーがくっついてきて目出度くバンド完成と相成った。

そして驚くことにバリウスさん！元アルビオン貴族のメイジだったそうな。

人は見かけによらないものである。

バリウスさんの父君が借金を残して他界、当時１３歳のバリウス

さんは特に後ろ盾も無く、爵位も高く無かった為、流されるままに貴族の爵位を捨てることに。
その後は少ない貯蓄でアルビオンの廃墟でなんとか生活をするも、アルビオンの寒冷な気候は子供に耐えられるような優しいものでは無く、寒さに震えながらその日暮らしの毎日。
そして当てもなくフラフラと暖かい土地を求めてトリステインへやってきて、トリステインでは何かと需要のある傭兵メイジとしてやっていく事になったそうだ。
そして息子のヨシュアが誕生したと同時に現役を退き、この『バリウスの酒場亭』を開く。
よって息子のヨシュアも一応は魔法が使えるである。
と言っても訓練もほぼ受けていない風のドットメイジなので私が学院の授業の暇を見て作成した魔法式エレキベースで、演奏の練習＋魔法の練習といった感じだ。
デイジーのほうも、大きなドラムセットを扱うには体格的にも無理なので、バス・タム・シンバルが1点づつあるドラムを四苦八苦しながら練習している。

バンドを組んだと言ってもハッキリ言ってこの2人の演奏はまだまだ店に出せるレベルでは無い。
そう簡単に出来てしまってはこっちもアレなのだが、リズムやコードを1から教えているので、この数ヶ月はひたすら練習を積む事にさせている。
ひとしきり汗をかき、2人に来週までの課題を伝え、練習後は3人ワイン片手に談笑するのが通例だ。

「しかし、まさか兄貴が貴族様だったなんてな～正直どこの浮浪者かと思ったっス」
「否定できないわ。ぜんぜん貴族らしくないんだもん」
「いや、もうね。それに関しては痛いほど身にしみてるから…トホホ」

うな垂れる私を見てカラカラと笑う2人に、ずいぶんとこの酒場にも慣れたものだと実感する。
ここに来た当初は酒場も、とてもじゃないが繁盛しているとは言えない惨状だった。
虚無の一夜に10人客が入るか入らないか、よくそんなんで経営続けていたなと思うだろうが、今日び、トリスタニアなんてそんなモノである。
一部『魅惑の妖精亭』のような例外もあるが、あれはきっと原作補正がかかっているだけだ。
ちなみに私が貴族である事はバリウスおじさん始め、ヨシュアやデイジーも気づかずに、ただ魔法が使え不思議な演奏をする旅の歌い手的な印象だったようだ。
だから、男爵子息である事を教えると3人は口をポッカリ空けて信じられないといった表情で固まった後、慌てて頭を伏せてきたのだが、

「いや、別に気にしなくていいから！普通に接してくれていいから！」
っと強引に説き、普通に接してもらえるようにした。

その後、なぜかヨシュアからは兄貴と呼ばれるようになったのだが、見た目同世代の人間に兄貴と呼ばれるのは悪グループのボスにでもなった気分で嫌なのだが、本人曰く、なんかそんな感じだから

と逆に押し切られてしまった。

「そんな事言ってぇ、兄貴はうちらトリスタニアっ子の中ではけっこう有名っスよ！」

「そうね、生意気にも、この前だってステージが終わった後に若い子に話しかけられてじゃない？『仮面の応援者』に『ロックの開拓者』さんだっけ？」

「それは言わないでくれ～二つ名とかハズすぎるから！」

「兄貴は奥ゆかしいでやんすね」

「「ハッハハハハ！」」

「グォォ～」

『仮面の応援者』―

まぁ私の二つ名みたいなもので、私が酒場の特設ステージに上がる時は、貴族は普通こんな店で歌っていない、バレないように顔を隠したほうがいいとバリウスさんに言われ、私も万が一にも学院の面々に知られたく無いので、鼻から上を隠した仮面舞踏会で使用されるような仮面をつけている。

なぜそれで応援者なのかと云うと、この酒場で歌い始めてからわかった事なのだが此処トリスタニアの平民には応援歌が非常にウケる。

そういうジャンルの音楽が無かったからと言えばそれまでだが、時勢的にも平民の生活的にも、応援歌は心に響くらしく、『明日があ〇さ』や『ガッ〇だぜ！』などを歌いだすとお客さんは泣きながら明日からも頑張ろうという気になるようで、閑古鳥が鳴いていた店も、ヨシュアやデイジーが読んでくる若者の友人達や、聞きなれない音楽にソロソロと店に入ってくれたお客さんがライブのある日は通ってくれるようになったりして、今では酒場亭収客限界の２０人くらいが虚無の曜日に騒ぎ笑い泣いて過ごすようになった。

バリウスおじさん大満足である。

ステージ後は毎回盛大な拍手で幕をしめられ、中には個人的に私に会いたい。

仮面の青年を紹介して欲しいとヨシュアに詰め寄る若い女性もチラホラ…。

まさに現代音楽の賜物である。

「まぁ、個人的には嬉しい事なのかな？」

「兄貴は鈍いっスからね。そういえば学院のほうはいいんすか？」

「あ！そうよギムリ！なんか問題があったみたいな事言ってなかった？」

「あ～アレねぇ…」

人生とはそんな楽しい事や嬉しい事ばかりの毎日であるはずが無く。

現在、魔法学院の私の学年生徒は3日間の臨時休校となっている。

臨時休校と言っても、単純に教室が使えないのだ。

主に桃色髪の公爵令嬢と、ひとりのメイジの手によって…

無意図の惨状2（後章）（前書き）

長いです…。
ゆっくりお茶でも飲みながら読んでください＞＜b

無意図の惨状２（後章）

「フン！八ッ！おぉぉぉぉ！アバンストラーーーーシュ（笑）」

その日、私は久々に早朝訓練に出かけていた。
たまに早起きして、ひんやりと涼しい風に当たりながら汗を流すのも実に気持ちがいいものである。
ひと通り、訓練を終えるとまだ授業まで時間があることに気づいた私は在庫の切れかかった歯磨き粉の材料を採取しなければと思い立った。
学院からアムーサの森まで馬で３０分ほど、授業開始まで２時間もある。
行こうと思えば往復しても余裕で間に合う。
だがしかし、

「ん～今から出かけるのだりぃ～」

非常にめんどくさいのである。
む～む～唸りながら歩いていると、広場の隅に見たことの無い草葉を見つけた。
試しに匂いを嗅いでみると、どうだろう！この水々しいフルーティーでいて、どこか嗅いだ事のあるような香りはまるで某有名薬品メーカー、フラワーキングが生み出した名歯磨き粉『クリア◯リーン』じゃないか！
歯磨き粉の新素材を入手した私は早速、新歯磨き粉の作成に取り掛かろうと、気持ちのいい汗をかいた私は上機嫌に学院の研究室に向かった。

「あら？ギムリじゃない朝早いのね？」

「おはよーミス・モンモランシ、新しい歯磨き粉の素材が見つかったから早速試そうと思ってね」

先客がいたようだ。

先客の名前はモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。

言わずと知れた金髪縦ロールが良く似合う伯爵令嬢様である。

彼女とは研究室で薬品を取り扱ったりする時によく出会い、彼女の思い人（？）のギーシュと私が良く話す事もあり、それなりに親しい仲になっている。

実際はお互い貧乏気質という所もあり、気の合う職人仲間という感じだ。

このように挨拶をしている間でも彼女の注意は薬品からそれていない。

う～ん！まさに職人である！

彼女の邪魔をしては悪いと自分も作業に入る、歯磨き粉つまりは研磨剤の材料なんてものは、メイジである私達にとっては簡単でお手軽なものである。

「ふんふ～ん♪パンパカパーン！クリア○リーン混ぜるよー！そして練る練るね～るね♪」

今日はそこに新素材を混ぜてみる。

心なしかテンションも高い。

そんないきなりテンションに身を任せて混ぜたりして大丈夫なのか？

きっとダイジョーブである。

だって私の中のダイジョーブ博士がイケるよ！っとＧＯサインを

だしているのだから！

「ふふ、今日はヤケにご機嫌ね？」

っとモモランシ嬢がこちらをチラリと見て含み笑いを浮かべている事に気づき、ちょっぴり反省である。

恥ずかしい少しテンションが上がりすぎたようだ。

それはともかく新素材クリア〇リーンを混ぜ込んだ新歯磨き粉が完成した。

早速、自分で使用して確かめてみる事にする。

「おぉ！」

まず最初にくるのは、舌をピリリと刺激するあの独特の辛味。

そして鼻で呼吸する度に鼻腔を刺激する清涼感！

間違いない！これはクリア〇リーンだ！

「これはいい物ができ…あれ？」

「ギムリ？」

突然襲う眩暈に意識を失いそうになった。

モモランシ嬢が自分の研究をほったらかして心配そうに私をみている。

なにが起きた？

視界がボヤける。

『おおギムリよ、死んでしまうとはなさけない』

神父が語るお約束の言葉が頭を過ぎった。

「ちょっとギムリ！この薬草って火薬の原料じゃない！すぐに吐き

出しなさい！」
「ふぇ？」
モモランシ嬢が私のクリア〇リーンの薬草を見て驚愕と同時に顔を青ざめさせた。
火薬？
アレ？思考が上手く回らない、たしかにあの独特の鼻につく匂いは…？
こうしている間にも私の意識は今にも遠く落ちそうになる。
「待って！すぐに解毒するわ！でも解毒の妙薬なんて…そうだ保健室に行くわよ！そこなら多少の薬があるわ！ほら肩に掴まって！」
そういうとモモランシ嬢は私の腕を彼女の肩に回し、ゆっくりと保健室に向かって歩き出す。幸いここから保健室は近い。
身長差がかなりある為非常に歩きづらいはずなのにモモランシ嬢はなんとか踏ん張りながら私を保健室の３つあるベッドの１番入り口に近いベッドに横にさせ、急いで薬品を作りそれを私に飲ませ私に『解毒』の魔法を唱えた。
私の意識はもうすでにギリギリである。
しかし彼女が『解毒』の魔法を唱えた瞬間気分がスッと楽になった。
「ふぅ、まったく調子に乗ってるからそうなるのよギムリ？とりあえず解毒は終わったけど今日１日は眠って安静にしている事！と言ってもたぶん起きれないでしょうけど？まったく世話焼かせないでよね！」
プンプン怒りながら私の大きな体に布団をかけるモモランシ嬢。

「ありがと…」
「無理に喋らなくていいわ。もう寝なさい。この危険な薬草は私が教室のゴミ箱にでも捨てて置くから」
私の薄れていく意識の中で最後に見たのはモモランシ嬢の呆れたような、母親のような優しい笑顔だった。
気を失った私は夢を見た。
それは幼い頃から原作を忘れないように何度も何度も思い出し続けた『ゼロの使い魔』。
夢を見るという事は記憶を定着させるのに必要不可欠な存在だと前世のテレビ番組でやっていた。
原作を思い出し続けたせいか、『ゼロの使い魔』が夢にまで出てきてしまった。
夢の中で私はサイトになっていた。
勇敢にもルイズの身代わりになってアルビオン共和国の7万の兵と戦いのシーンである。

「ルイズ〜！」

瀕死の重傷を負いながら最後に彼女の名前を思いっきり叫ぶ、私ことサイト。
そして私はさらなる夢の奥へと導かれるように眠りこけた。

本日の授業も終わり、夕日が差している保健室には依然寝こけているギムリ少年のベッドの隣に、ため息を尽きながら体を横にしている少年がいた。

「おじゃる…」

その体躯は乾いたネギのように細く、それでいて身長は低い。
顔のつくりは可憐な少女のような童顔な。
口癖は語尾に「おじゃる」「ごじゃる」をつける少し変わった少年だった。

少年の名はニール・ド・ルーベンス子爵子息。

彼のため息は止まらない。
それも仕方ない。彼は今日失恋したばかりであった。
恋慕を寄せる相手は同級生のモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。通称モモランシーと呼ばれている女生徒だった。
彼から見た彼女は、いつもどこか儚げで哀愁を漂わせている可憐な少女だった。
しかし、そんな彼女の周りには常にギーシュ・ド・グラモンをはじめとする男子生徒がいた。よって話しかけようにも切欠が掴めなかった。
だがしかし、彼は友人達からミス・モモランシーは薬の研究のために朝早くから1人で研究室に通っているとの情報を入手したのだ。
彼は、『ここにかけるしかないでおじゃる！』っと万感の思いで今朝、早起きして朝早くに研究室に向かった。

そして見てしたまった。

ミス・モモランシーが１８０センチはあろう巨大な体躯をした青年に寄り添いながら、保健室に入っていくのを。
その２人はまるで、幼き頃にみた『イーヴァルディの勇者と姫様』の演劇にでてくるような姿だった。
魔王を倒し、疲れ果てた勇者が倒れないように優しく、それでいて力強く勇者を支える姫様のような神々しく見えた。
彼等はきっとあのまま２人ひっそりと誰もいない保健室で愛を育むに違いない。
少なくとも彼、ニール・ド・ルーベンスの目にはそう映ったのだ。
そして思いも伝えられぬまま、彼の初恋は終わりを告げた。

「我輩は愛していたでおじゃる」

その日の授業はまったく耳に入ってくることは無かった。
心がどこかに飛んでいってしまったように授業をこなしていた。
だから気づかなかった。
普段ならニールの隣の席に座るルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの失敗魔法の被害に遭わないように注意深く行動している筈なのに、
今日は彼女がニールの隣で爆発魔法を起こして彼が爆発の余波によって数メートル飛ばされ保健室に担ぎ込まれるまで気がつかなかったのだ。
思い出すのはミス・モモランシーの隣にいた筋肉質で巨大な体躯の男。
まさしくニールとは正反対の男であった。

「我輩には資格がないのでごじゃろうか…」

またも溜息をつき呟く。
先ほどから、隣のベッドからゴチャゴチャと五月蝿いひとり言が

聞こえてくるが、ニールの耳にはその内容は入ってこない。
駄目だ。吹っ切れない。どうしても彼女、ミス・モモランシーが時折振りまく儚い笑顔が頭をよぎる。
「それでも好きでごじゃるよ〜。どうしても忘れられないでごじゃるよ〜」
ニールは痛む体に鞭を打ってベッドから起き出す。
そして自分の教室へと走り出す。
まだ、まだ教室に彼女が残っているかもしれない。思いを伝えよう。
例えどんな結果になろうとも正直に自分の気持ちをぶつけてみるでおじゃる。
そう思いながら彼は教室へ向かい走り去っていくのであった。

桃髪の少女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールもまた、この保健室にいた。
彼女はこの学院に入学してから焦っていた。
理由は単純。
魔法が使えない。
それに尽きた。
同級生達が四苦八苦しながらも魔法を習得していく中、自分だけ

が未だ一つも魔法が成功しない。
ヴァリエール家の宿敵であり、何かと五月蝿く絡んでくるキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーは火のトライアングルなのに。
自分は誇りある公爵家のトリステイン貴族なのに。
もちろんカバーできる面は必死に頑張った。
魔法は毎晩練習したし、知識が足らないんだと勉強もたくさん行った。
おかげで座学は常に学年上位を維持している。
だが、一向に魔法が上手くなる気配は無く。
毎回、どんな魔法っを使っても爆発してしまう。
同級生からは魔法が一つも使えないという理由で『ゼロのルイズ』なんて不名誉な2つ名までつけられてしまった。
屈辱だった。
だから人に認められたい。名誉を取り戻したいと今日の授業でも必死に魔法を唱えた。
しかし結果はまたも爆発だった。
あまつさえ隣にいた生徒を巻き込み、さらには爆発の余波で自分まで気を失う程の失敗だった。
私は人に認められる事ができるのだろうか…。
そんな思いが思考を駆け巡りベッドの布団を頭まで被ったその時、突然ベッドの隣から大きな声が聞こえてきた。

「ルイズーーーー！」

突然の大声でルイズは肩をドキリと震わせた。
そりゃ自分の名前が突然大きな声で呼ばれれば誰でもビックリするだろうが、その声はどこか心の底から搾り出したような胸に響く声だった。

「な、なな何よ！？」

思わず布団を少し開いて隣のベッドを布団の隙間から覗き込んだ。
となりのベッドにいたのはニール・ド・ルーベンスだった。
彼の事はよく覚えていた。
毎回授業中に私をチラチラと探るような目で見てきて、語尾に「おじゃる」とかつけている子爵子息だ。
別段、ルイズ自身ニールに対して特別な感情など持ち合わせていなかった。
ただ、隣の席の変な生徒くらいの印象しかない男だった。
その彼が急に私の名前を大きな声で叫びだしたのなぜだろうか？
やはり魔法で吹き飛ばしたのがいけなかったのだろうか？
そんな疑問が頭に浮かぶルイズ。
彼はベッドの上で人形のように動かなかったが、その目には涙が浮かんでいるのが見える。

「我輩は愛していたでおじゃる」

胸がドキっとした。

「ニールが私を好き？」

顔が真っ赤になるほど頭が混乱した。
驚きすぎて声がだせない。
なぜ彼は私を好きになったのか？
聞きたいのに声が出せなかった。
すると彼は大きな溜息をついた後

「我輩には資格がないのでごじゃろうか…」

と呟いた。

資格。

彼は子爵子息で私は公爵令嬢。

たしかに普通に考えれば資格は無い。

しかし私の婚約者もまた子爵である。それを考えると資格が無いなんて言えない。

「でも駄目よルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。私には婚約者がいるんだから」

そう自分に小さい声で言い聞かせる。

反応の無いルイズに諦めを悟ったか、ニールは肩をすくませるが、依然彼の拳は強く握られたままであった。

「それでも好きでごじゃるよ～。どうしても忘れられないでごじゃるよ～」

そう言い放ったニールはベッドから這い出て保健室を出て行った。

追いかけなきゃ駄目よルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！

彼は学院に来て失敗続きの私をずっと見ていてくれたのかもしれない。　せめて、せめて自分の声でごめんなさいを言わなければいけない！と彼女は学院にきてから始めて出会った魔法うんぬん関係無く自分を見てくれていたであろう少年を追いかけるように保健室を飛び出した。

教室にて―

ニールは教室を見渡す。
しかしそこには人っ子ひとりいなかった。
むしろ当然だった。
もう本日の授業は終わっているのである。
普通の生徒はさっさと帰るなりテラスで談笑したりと各々好きに過ごしている時間であるからだ。
興奮しすぎた頭を冷やすように横に振るニールは突然開かれた教室の扉に驚くように肩を震わした。

「ニール！！」

そこにいたのは桃色髪の貧乳少女、色気の欠片も無く、あまつさえ今日授業中にニールを吹っ飛ばしたルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールだった。

「ななんでおじゃるか？急に大声だしてビックリするでおじゃるよ！」

ニールの中でルイズは警戒すべき相手ナンバー1である。
そんな少女はなんのようだろうとニールは疑問を浮かべた。

「あ、ああアナタの気持ちは嬉しかったわわわ。で、ででも御免なさい私には婚約者がいるの！だからあなたの気持ちには答えられないの！」

ルイズは何を言っているんだろう？
これでは我輩がルイズを好きみたいではないか。
当然の疑問である。

「ルイズ？あなたは何を言っているでおじゃるか？」
「え？」
キョトンと目を丸めるルイズ。
「我輩がゼロのルイズを好きになるわけないでおじゃろう。勝手な勘違いは止めてもらいたいでおじゃるよ」
「はいいいい？」

その言葉に今度はルイズが疑問符を浮かべる。
勘違い？
じゃあさっきの告白まがいのセリフは？
すべては私の勘違いだった？
なんだろうこの理不尽は？
なにそれ？
そんなセリフが頭の中を駆け巡る。
ルイズの心はカッと熱く乱れていく。

「まったく～我輩とお付き合いしたいならそれなりに「もういいわ！」おじゃ？」

突然声を遮られたニール。
そしてスタスタと無言で教室を出て行くルイズ。

そしてルイズは扉の前に立つとサッと杖を取り出し。

「私の誇りを踏み躙った罰よ！食らいなさいファイヤー・ボール！」

ルイズは教室出る瞬間、ニールに向かって魔法を唱えた。

だがしかし、その魔法はニールには命中せず教室の隅のゴミ箱に命中した。

っが、なぜかその時放った魔法はいつもルイズが起こす爆発の数倍の威力で大爆発した。

それは嵐のような爆発だった。

実際はギムリが摘んだ薬草をモモランシーが教室のゴミ箱に捨て、それがルイズの爆発魔法にさらに威力をつけたのだが、そんな事は知らないニールはその暴風で窓ごと吹き飛ばされるように外へ放り出されてしまった。

ルイズも自分の放った教室を崩壊させるような大爆発の威力にビックリしたが、彼女の心はそれどころじゃなく。

自分の気持ちを弄んだニールへの苛立ちで一杯だったためその場を後にした。

バリウスの酒場亭にて―

「ん～、私が起きた頃には、なぜか教室が全壊してて授業も中止になったんだよね。
なぜか全治2ヶ月の重症を負った生徒がいるらしいんだけど…まぁ私には関係ないんだけどね。ハハ」
「そーだったんスか」
「部屋丸ごと爆発って物騒ね～。アタイ、平民でよかったかも」
「貴族も楽じゃないのさ」
「こんな所で暢気に酒飲んでるアンタが言うんじゃいよ！」
「そうっスよ！」
「そりゃそうだ」
「「「ハハハハハ」」」

そうして事件の根源たるギムリ少年は、今晩も楽しく飲み明かすのだった。

無意図の惨状2（後章）（後書き）

前章と後章の文字数の差が半端無いっすw

長々とお疲れ様でした。

よければ次回もまたよろしくお願いします。

ニックでした。

師匠との邂逅（修行・過去編）（前書き）

修行編は番外編みたいなもので、本編に少しづつ混ぜていこうと思います。

師匠との邂逅（修行・過去編）

「人は強い生物では無い。
そんな事は当たり前の事だが、この世界ではそれを忘れた人間から死んで逝く。
それが戦場なら尚更の事である」
と最近始めた仕事によって、やっと貴族らしく（？）晩餐にワインを飲めるようになった私は意味深な事を呟いてみる。

ふぅっとため息をつき、テーブルの上に乱雑に置かれている歌詞や楽曲の書かれてる羊皮紙を眺めながら私はふと唐突に昔を思い出し苦笑した。
こうして散らかったテーブルを見ていると私の修行時代の様子が脳内を駆け巡る。
と言っても『師匠』曰くまだまだ半人前だそうで、私もそれを自覚している。
ハルケギニアは原作で描かれている世界だけでは魔法と剣ファンタジーだが、逆に言えば魔法と剣が必要なくらいな危険な世界だとも捉えられる。
現代日本のように”閉じこもって置けば安全，な場所なんて無いのだ。
それこそアッシュモンド領は平和だったが、寝ている間に盗賊が来たり、幻獣に襲われたらどうしようと疑心暗鬼になったくらいだ。
おかげで、生まれた当初は、発狂しそうになった。
親はただの夜泣きだと感じていたのだろうが。

ご存知のとおり、人はいきなりは強くなれないし、強くなるにはそれなりの訓練が必要になる。
サイトやルイズ？

あの2人は例外だ。虚無なんてぶっそうな属性にガンダールブなんてとんだチートだ。
私が二次創作で出てくる格好いいオリ主みたいなパターンだったら、神から与えられたとか突然目覚めた不思議能力で無数の剣を操ったり、心像風景を現実に塗りかえれたり、カメハメ波とか撃てたのだが…
現実は無常である。

原作に登場していた中で強戦闘者と言えばタバサやコルベールが思い浮かぶ。
コルベールはともかく、タバサの戦闘力は生まれつきの魔法の才もあるだろうが、一重に危険な任務に明け暮れる生活と、それを成してまでも叶える夢があり、それに向かう努力をする覚悟があったからだろう。
あんな小さな子供が危険と隣り合わせの世界なのだ。
いつ私の身に不幸が訪れるかわかったものでは無い。

婉曲したが、いくらある日突然何の前触れも無く‘転生憑依’したという奇妙奇天烈荒唐無稽な存在たる私でも人間という枠組みに当たる以上それは例外では無いという事だ。
つまりは、修行でも鍛錬でもなんでもしないといつまで経ってもへな猪口メイジのままなのである。
よって、この世界で起こるであろう未来を知っている私には強くなる必要があった。

結城真人こと、ギムリ・ド・アッシュモンドは散らばった羊皮紙を整理しながら訓練に明け暮れた毎日を思い出していた。

「あれは私が13歳になった頃…」

「久しいなサムス、その通りだ。元々この子が言い出した事でな、我が子ながら少々変わった子供だが基本的にはいい子…のハズだ」

屋敷の執務室にて父上が片手を挙げて挨拶を交わすのを私は隣で大人しくしながらそれを眺めていた。

「ガイル様、つまり、ご子息様に私が戦闘訓練の面倒を見させて頂くということで？」

私の面前には父上と家庭教師候補である中年のおじさんが対面していた。察するにこの2人は顔見知りのようである。

父上から紡ぎ出される『ハズ』というキーワードに少々不満があったが、とりあえず私は13歳になり徐々に男らしさ…というか精通が始まり泣きながら「やっと…男に戻れた」と感動の涙を流していた頃、体作りの為にそろそろ格闘戦闘の訓練もしないとなと思いつき、両親に頼み込んで元王軍の軍人に家庭教師をして貰う事になった。

王軍とはトリステイン国王を最高司令長官とする、王政府直属の軍隊であり、王政府に属する貴族の将軍や士官が、金で集められた

傭兵を兵卒や下士官として指揮する地上部隊の主力である。
幸いにもこの話をしていた時、元王軍の騎士がアッシュモンド領に住んでいると知っていた父はすぐさまその騎士を家庭教師を打診し領邸に召還してくれた。
そしてやって来たのは１８０センチはあろうタッパ（身長）に絵に描いたようなガテン系の体躯をしたやけに歯の白さが鼻につく大男だった。
私の身長が１６０センチ無いくらいなので、かなり見上げる形となる。

「しかしガイル様、本当に私なんかでよろしいのでしょうか？正直、私の技術は貴族らしい闘いとは程遠いものですが？」
「いや、それが本人が戦争経験あり実戦経験の豊富なものに師事されたいと聞かんのでな、そこでお前に白羽の矢が立ったのだ」
「手加減…しませんよ？」

サムスと呼ばれる男の目が鋭く光る。
良かった。
正直、どっかのボンボン貴族の弟子にでもつけれられるのかと内心穏やかじゃ無かった。サムスと呼ばれた大男も一応貴族なのだろうか、父上からの扱いは平民のそれとは少し違う接し方である。
おそらく元貴族の次男坊とかそこらへんだろう。
にしてもどうして私の周りは筋肉モリモリのむさ苦しい野郎ばかりなのだろう。
将来の自分の姿を想像してここの汗が流れた。
どうせなるなら、こんな『引退後の筋肉マン』みたいなおっさんじゃくて『東方不敗』みたいな素敵なじい様に成りたいものだ。

「まぁ、ギムリなら大丈夫だろう。よろしく頼むぞサムス。こんなんでも一応うちの跡取りだからな徹底的にやってくれ」

これは私が頼んだことだ。
名目上は、誇りある貴族として、また将来この男爵領を継ぐ者として心身共に磨いておきたいという事にしてある為、遠慮なく鍛えてもらうように言ってあるのだ。

「ハッ！了解しましたガイル様、非才の身でありますが精神誠意尽力させて頂きます。ギムリ様、これからよろしくお願いします」

ビシっと敬礼する男の姿は、まさしく軍人のそれだったが、態度を少し崩して私のほうを向き握手をした。

「はい、よろしくお願いします…えっとサムスさんでいいのかな？」
「ふふふ、サムスと呼び捨てにしてくだいギムリ様、貴族の子息がそんなに簡単に頭を下げるものではありませんぞ？」

とりあえず頭を下げ自己紹介をする私に苦笑しながら首を横に振るサムスさん。
当初こそ何故に貴族の子息に格闘訓練の家庭教師なのか…と驚いていたがサムスさんだが、私をひと目見やるとニヤリとうすら悪い笑みを浮かべ、図体に似合わない丁寧な言葉使いで父上からの依頼を承諾し、父上は後は任せた言わんばかりにその場を後にした。

2人きりになった私とサムス。
少々気まずい時間が流れる。
なぜかサムスは私をじっと熱い目でみつめる。

「あの…私にそういう趣味は無いのですが？」

直球で釘を刺した私を誰が攻められようか。

サムスは首を傾げたが、意図した所に気づいたのか、そうじゃねーよとぶっきらぼうに笑いながら否定した。
先ほどの丁寧な言葉使いは、あくまでも父上の前限定だったようだ。

「くくく、こんなガキがそんな目してたら気にもなるってんだ。テメー、何に怯えてんのか知らないが…まぁいい。しっかり鍛えてやっから今日は良く寝ておけ」

とても意味深なセリフを吐かれた。

「今日からでは無いのですか？一応動きやすい格好をしてきたのですが」

サムスはくくくとヒーローモノの悪役風な笑い始め、こちらにも色々と必要な準備があるから明日の朝一番に訓練を開始するので玄関前に出てくるように、とだけ伝えると帰っていった。

これが私が生涯を通して『師匠』と呼ぶようになったその男との邂逅であった。
その第一印象は『おかしな奴』であった。

ちなみに後日、サムスにその事を伝えると私の第一印象も『変なガキ』だったそうだ。

思わず「逝けばいいのに」と呟き特訓メニューが追加されたのは

今では笑い話である。

身に余る使い魔（前書き）

更新遅れました。

もし、更新待っていてくれていた方がいましたら謝罪申し上げます

＞＜

携帯で読んでいる方が読みにくいかな？

と思い、書き方を少し変えてみます。

少しずつ修正していこうとおもいます。

身に余る使い魔

夕日は沈み、空の支配者が太陽から月天に変わり終わった。　虚無の曜日、トリスタニアのバリウスの酒場亭では今日も日中連日に勤労に勤しんだ平民達がひと時のお祭り騒ぎを起こしていた。

「がんば～るさ！負けな～いのさ♪」

「「「「ハイ♪ハイ♪ハイ♪」」」」

酒の肴というか、御目当ては虚無の曜日にこの酒場で開催される私、ギムリ・ド・アッシュモンドと愉快なバンド仲間2名が送るプチライブ。

私がこの店で唄い始めてもうすぐ1年にせまろうかという所だ。

幸いにも私の演奏はトリスタニアの労働層に受け入れられたようで、安定した集客率を勝ち取っていた。

それが少し誇らしい私であった。

「キャー！　ファントム様～～」

「『かんぱい』を唄ってくれ～」

「バーロー！次は『バンザイ』だろ！」

「語呂が似てるだけだろ！」

「どっちも名曲よ！　両方歌って～」

「ヨシュアく～ん！　こっちむいて～！」

「デイジーちゃ～～～ん！　ォオ！　今日も豪快だな～～！」

1年間の成果が出始めてバリウスさんもご満悦である。

ん？

ファントムってのは私の事だ（笑）

烈風カリンよろしく仮面をしているため、お客には私の正体がわからないようになっている。
それでも私の正体を知りたい熱烈なファンがデイジーに詰め寄り困ったデイジーは私が以前に話していたオペラ座の怪人を思い出し、咄嗟に彼はファントムよ！…と苦し紛れに返答したものが口コミで広がってしまったのが原因だ。

正直に言おう！とても恥ずかしい…と。

そんなこんなで今日も演奏をしている私なのだが、実は今現在演奏中なのに冷や汗ダラダラの危機に陥っている。
ライブをする時は毎回多かれ少なかれ緊張するものだが、私がなぜ今まで以上に緊張しているかというと答えは簡単…いるんですよ！
お客さんの中にですね？緑色の髪と凛とした気品をかもし出すメガネが特徴のアノお方が…ｏｒｚ
ミス・ロングビルってかフーケであり、サウスゴータ領の元令嬢マチルダ・オブ・サウスゴーダ様が酒場の隅に腰かけて私達の演奏を気持ちよさそうに拝聴なさっているですよ！
しかも時より目が合うとニッコリと優しい笑みを浮かべてくる始末ですよ？

バレた？
バレテルンデスカ？

とまぁ、そんな緊張したライブも無事に終わり、いつもなら3曲は行うアンコール演奏も1曲のみに短縮して、そそくさとバックヤードに引っ込まして頂きましたよ。

「ふ～、なんとかなったかな」
「兄貴？今日はどうしたんですかい？えらく汗かいてますね？」
普段と違う様子に気づいたか、ヨシュアが心配そうにたずねて来た。
「いや、ちょっと店に知り合いがいてさ？たぶんバレてないかな…かな？」
そういって苦笑しながら流れた汗を拭き、一杯の温いビールで喉を潤す。
熱気に当てられたてかいた汗と冷や汗で体内の水分は思っていたよりも消耗していたのか黄金色に光るビールの喉越しが普段より心地よく感じた。
まぁ、水分が足りない時にアルコールを摂取するのは、アルコールを分解するためにさらに体内の水分を消耗させるため本来タブーなのだが、そこは水に流し…いや、ビールに流してくれ。
「ぷはぁ～！うめ～～！」
「兄貴…なんか貴族のぼっちゃんにはとても見えないッスよ…」
「ほんとね…」
呆れたような2人に構わず2杯目に手をつける。
ハルゲニアで酒といえばやはりワインなのだが、そこはやはり日本人だったころの名残か、仕事終わりはビールのほうが口に合ってしまう。
我ながら立派な庶民派である。
貴族の人物像を崩壊させるような私の行動を見る2人の冷めた目

にはすでに慣れたものである。
とりあえず3人で今日の打ち上げも兼ねね楽しく談笑していた所に鼻をだらしなく伸ばしたバリウスさんが1枚の手紙を持ってやってきた。

「おう！3人ともおつかれさん！ギムリ…っと今はファントムか！ハハハ！なんか偉い美人さんがお前にこの手紙を渡してくれってよ！いや～あまりにべっぴんさんだったから思わず引き受けちまったぜ」

快活に笑うバリウスさんに呆れながらも、そんな美人さんからのファンレターに嬉しさを感じ、手紙を受け取り中身を読む。

―ファントム様へ

本日、はじめてアナタの演奏を拝聴させてもらい、とても楽しいひと時をおくらさせて頂ました。
歌っている時のアナタの表情はその仮面で見えませんでしたが、きっととても良い表情をしているのでしょうね？
思わず私も笑顔がこぼれてしまいました。
重ねて、楽しいひと時をくれたファントム様に感謝を。

追伸
私はとある学院で働かせてもらっている身なのですが、明日は大事な進級試験なので、こうしてお手紙のみのご挨拶となりましたが、是非1度あなたの素顔を見たいと思っております。
ファントム様も夜風は体に毒なので、早めに床につく事をおすすめします。

―あなたのファンより

ずいぶんと普通のファンレターだった…。

「バリウスさん…その美人さんってどういう姿見だった？」

「ん？そうだな～髪は綺麗な緑でよぉ。キリっとした目にメガネが似合っててな？どこか仕草のひとつひとつに気品がある感じだな。平民の服着てたが、ありゃきっと貴族か元貴族だな。隠しているようだったが腰に杖持ってたしな」

少しバリウスさんの目が細く光り、その雰囲気にデイジーがヒっと声をあげると、バリウスさんはすまんすまんっと謝った。

ミス・ロングビル…ね。

バレてんのか？
ただのファン？
どうなのか？

「……どうなんだコレ？」

「「「？」」」

『疑問』

『焦燥』

『不安』

そんな思いを残して使い魔召還の儀前日の夜は過ぎていった。

天気は雲一つ無い快晴。

時より吹くハルケギニアの大地独特の乾いた生暖かい風が時より春1番を彷彿させる。

場所はトリステイン魔法学院ウェストリ広場にて、貴族の卵達が今か今かと自分の召還する番を待ち続けていた。

そんな騒がしい群集の端で私ギムリ・ド・アッシュモンドはニューヨークの地下鉄駅なみに暗いダークな空気を漂わせていた。

このハルケギニアに生を受けて十数年…とうとうこの日がやってきた。

そもそも召還の儀とは、読んで字のごとく、メイジが生涯を共に

する使い魔を召還するサモン・サーヴァント。
時に主人の剣となり、時に主人の盾になり、時に主人の心を癒し、いついかなる時も主人を手助けすることを使い魔に誓わせるコントラクト・サーヴァントを行うことである。
ちなみに、この使い魔召還の儀式が、ここトリステイン魔法学院の進級試験でもある。

「とうとう始まるんだ…。ハハハ…」

気づけば乾いた笑いがこみ上げて来た。
そんな私を心配してか同級生のレイナールとワックスが話しかけてきた。

「ちょっとギムリの様子おかしくない？大丈夫か？」
「そっとしといてあげようよワックス。きっと緊張してるんだよ？いくら過去に失敗した人がいないからって失敗しないわけじゃいんだかさ…実は僕もちょっとね」

そう言って少し緊張した面持ちのレイナールにワックスが肩を叩きながら大丈夫さと優しげに接する。
過去を見ても、この使い魔召還の儀に失敗した貴族はいないのだ。
どんなショボメイジだろうが必ず成功する。
だから誇りのやたら高いトリステインでは進級試験なんかにうってつけではあるだ。

すでにカエルやらモグラやら幻想種やらの召還を終えた生徒達はそれぞれの使い魔達を讃え賞賛しあい、ヴェストリ広場は賑わいを見せていた。

キュルケ嬢とタバサ嬢は原作通りサラマンダーと風竜を召還しており、やはりその2匹の存在感はその他の使い魔とは一線を画していた。
さてさて私だが、ぶっちゃけどんな使い魔が出てくるのか楽しみでしょうがなかったりする。
変な使い魔だったらどうしようかと云う不安も勿論あるが…。

個人的にはタバサ嬢の風竜とまではいかなくても空を飛べる使い魔が希望である。
なぜか？
だって馬って長時間乗ると尻が痛くなるからである…。
毎週のごとくトリスタニアと学院を往復している私には是非とも欲しい空移動である！
切実だ。

「では、ミスタ・ギムリ。始めてください」
コルベール氏に呼ばれ、私は呪文を紡ぐ。

「我が名はギムリ・ド・アッシュモンド。五つの力を司るペンタゴン。我と共に長き時を過ごし、我に従いし、使い魔を召還せよ」

……

……

…

しかし何も起こらなかった。

「あれ？」

思わず唸る。

失敗した？

どういうことだろうか？

詠唱が悪かったのかと思いその後、何度か詠唱を変えてみても成功しなかった。

「ふむ…これはどういう事でしょうか」

コルベール氏も一緒になって不思議そうに唸っていた。

この召還の魔法はコモンスペルであり、基本メイジであるならます失敗しない魔法なのである。

これにはさすがのコルベール氏もお手上げ状態で、取り合えず僕の召還は後回しという事になった。

ふむ。

この結果は予想していなかった。

まさか使い魔が召還できないと？

さすがに留年はまずいし、なんとかしないと思い、足りない脳をフルに使って考える。

精神力の込めは充分だった。

でも何かが足りないような。いや、むしろ何かが間違っている気がした。

詠唱？

いや、この魔法に発動ワードは特に意味を成さない。

どんな適当な発動ワードでも『何か』アクションは起きるはずなのだ。

現に広場の端で未だにサイト少年を召還出来ずにいるルイズ嬢だって、発動ワードを変えても爆発というアクションを毎回必ず起こしている。
何が間違っている？

…名前か？

ふと閃いた私は、コルベール氏に頼んでもう1度試験を受ける事に。

「我が名は結城真人でありギムリ・ド・アッシュモンドたる存在。五つの力を司るペンタゴン。我の召還に従いし使い魔を顕現せよ！」

目の前に光が宿る。
よかった。どうやら成功したみたいだ。
やがて、光が消えその姿を表しはじめ…

広場に大きな咆哮が走った。

「グルゥァァアアア！！！！！！！！」

赤い毛皮に赤い鬣（たてがみ）。
鋭く光った目にいかにも獰猛そうな大きな牙。
体長は…でかい！3メートルはあるぞ！

人間と百獣の王ライオンを混ぜたような顔面に太く大きな尻尾には無数の棘。
そして巨大な蝙蝠(こうもり)羽を広げた姿は食物連鎖の頂点に君臨するに相応しい威厳を持っていた。

「おお～これはマンティコアですよ！やりましたねミスタ・ギムリ！」

コルベール氏は揚々と私に賞賛の声をかけ、周りの生徒達も突然の咆哮に吃驚したものの、その姿を見て「すげ～！」っと云う声が聞こえてきた。

「ミスタ・ギムリ？呆けていないで、契約を」

思わず固まってしまった私に先生は肩を叩き、正気を取り戻した私は、マンティコアとの契約を済ました。

「すごいじゃないダーリン！マンティコアを召還するなんて！さすがよ！」

どこからともなくやってきたキュルケ嬢が賞賛の声をかけてくれた。
でっかい羽根付きライオン…もといマンティコアは何が嬉しいのか私の顔をペロペロとまた大きな舌で舐め始めた。
舌がザラザラし、時々鋭利で巨大な白い牙が頬に触れるのがなんとも言えない感情を私にもたらしていた。
傍目からみると大きな猫みたいな感じであろうか。

「また派手なのを召還したもんだね我が友ギムリ」
「……いい使い魔」

さらにどこからかやってきたギーシュとタバサ嬢。

「ハハハ…」

思わずこみ上げてきた笑いと引き攣った顔から流れてくる涙をマンティコアは不思議そうに眺めながらも、私の顔をペロペロ舐めていた。

父上、母上、不詳の息子は……なんかスゴイの召還しちゃいました。

ルイズ嬢ですか？
すいません今それどころじゃないんで後にしてください。

身に余る使い魔（後書き）

予想外ｗｗｗ

まさかの幻獣種を召還してしまったギムリ少年ｗ

今後の展開にどう影響するのか！！？

個人的趣向（前書き）

前回ではギムリ少年はマンティコアを召還しましたね。
マンティコアについてはオリ設定ですが、基本的にはググればどういう姿のモノかはわかると思います。
興味のある方はレッツ！マンティコア！

個人的趣向

マンティコア―

それは通常、人が訪れることが無いような深い森林を住処とする獅子型の幻獣である。

性格は獰猛…では無く比較的穏やかである。

だがしかし、敵意を持つ者や住処に侵入してくる者には容赦が無く、しばし人を襲う事もあるので平民間では恐怖の対象である。

『暇だから森で森林浴をしていたらお腹をすかしたライオンに出会っちゃった！アハ☆』みたいなコメディーノリで付き合える生物ではないのは確かである。

そんな獅子王こと、マンティコアの存在をハルケギニア中に知らしめるのに拍車をかける要因に、その運動能力自体がぶっ飛んでいるのも当然挙げられる。

竜種ほどの速度は出ないが、その分自在に空を飛び廻り、又、早馬を超える速度で大地を疾走し、時には川だってスイスイと泳ぎ渡る非常に高い汎用性。

どこのガンダムだ！という感じである。…自重。

そんな脅威的な生物を貴族連中は怖がらないのか？

答えは『怖いが、それ以上にカッチョイイ』である。

特撮のゴジラやキングギドラとかモスラやらに憧れた事は無かっただろうか？なんか強くて怖いけど……なんかカッコイイみたいな印象を抱いた人は少なく無いはずだ。　ハルゲニア貴族の少年少女からしたら、そんな憧れの対象がマンティコアやらヒッポグリフやら韻龍なのである。

勿論、ゴジラやらの本当の意味での幻想種と違いマンティコアは古くからハルケギニアに存在する生き物である。

ハルケギニア史初期の時代ではグリフォンや竜種等より汎用性の

高いマンティコアが馬代わりに大量に戦場で投入された戦争なんてザラに行われていたらしい。
　そのせいか、現代では、その個体数は激減の一途を辿り、動物保護の精神も無いこの世界では目出度く絶滅危惧種一歩手前と云う悲惨な状況である。

　どこの世界でも人類はやりたい放題なのである。

　ともかく、今でもマンティコアが登場する逸話や武勇伝や物語が多く残されおり、貴族の少年少女はそれを子守唄代わりに親に聞かせられるのだ。　名物語である『イーヴァルディの勇者シリーズ』にも勿論登場している。
　なので幻獣種の中ではマンティコアやグリフォンは比較的貴族の少年少女達には馴染みのあるものである。
　そんな背景があるのもありハルゲニア貴族、特にトリステイン王国ではマンティコアの事を『森林の公爵』とも評されている。
　トリステイン王国にはマンティコア隊なんて名前の部隊もあるくらいだからその神聖化は伺える。
　部隊名通り数こそ少ないがマンティコアもいる、唯でさえ少ない個体数なので乗り手も相当の精鋭揃いだと有名である。
　余談だが、烈風カリンも現役当時はマンティコア隊のしかも隊長を務めていたらしい。
　ハハハ！すごいよねルイズママ！！

「ガウ？」

「ただの独り言だよレイラ……少しは現実逃避くらいさせてくれてもいいじゃないか」

使い魔召還の儀も無事（？）終わり各々ヴェストリ広場から離れた後、私は呼び出したマンティコアを使い魔用の厩舎で何をするでも無く眺めボヤいていた。

当のレイラはどうかした？っと可愛く不思議そうに首を傾げている。

レイラと云うのはこのマンティコアの名前である。

ちなみにメス…もとい女の子らしい。

名前の由来？　個人的趣味である。後悔はしていない。

「ガゥゥ～ン」

「こらこら、わかったわかった構ってやるから！　マント引っ張るのヤメレ！」

レイラとはコントラクト・サーヴァントの恩恵で感情共有ができるので言葉こそわからないが精神状態などは伝わってくる。　摩訶不思議コントラクト・サーヴァントである。

それで、なぜ未だに私が厩舎に残っているかと云うと、さすがに全長3メートル、翼を広げると横に5メートルはあるレイラを自室に連れ帰る事はできないので、厩舎に預ける事になったのだが、あろう事かレイラは私が自室に帰ろうかと離れると大きな咆哮をあげて『行かないで～』と懇願するのである。

感情の共有のせいでレイラの『寂しい』と云う感情が伝わってきてしまい、どうにも残して帰る気になれなかったので今夜は厩舎でレイラと一晩明かすつもりだ。

なんだかんだでギーシュの例に漏れず私も自分の使い魔が大好きになってしまったのだ。　カエルやモグラ相手に愛と友情を語るよりは健全だと思って見逃して欲しい。

あぁ、ルイズ嬢のほうは無事にサイト少年を呼び出したようで何よりであった。
トリステインの、ひいてはハルゲニアの存亡を担う少年少女達が紡ぐ物語が開幕したのである。
案の定、サイト少年を召還した直後、広場は原作通りの騒ぎになり、ルイズ嬢のキスシーンが見れた。
正直、羨ましい…。
ルイズ嬢の性格はともかく、容姿の可愛らしさは間違い無く学院、いや、ハルゲニアでもトップクラスだろう。
個人的は大きめの双子山が好みな私だが、あの容姿ならば私も…
「ガゥ！」「イテ！！」
そんな不謹慎な事を考えていたせいかレイラに尻尾で頭を叩かれた。

「なんだよ痛いじゃないかレイラ」
「フフ～ン」

突然の攻撃に思わず顔を顰(しか)めてレイラを睨むと、彼女は当然だ！とばかりに鼻を鳴らしてソッポ向いていた。

「はは～ん、さてはレイラ。私がルイズ嬢の事考えてたからお前ヤキモチ焼いたんだな～」
「ガウゥゥ！！」
「ちょ！　痛いって！　尻尾で叩くな！　トゲが刺さるって……イタ！　悪かった！　俺が悪かったから」
「ブルゥ～」

冗談めかして言ったつもりが図星だったようだ。ってかそんな事まで伝わるのかよ。感情の共有恐るべしである！
レイラは依然としてソッポ向いて私に顔を合わせようとしない。

小さく嘆息してレイラの横にどっかりと座る。
「ほら、機嫌直せよ。　なんか歌ってやるからさ」
「？」
見上げれば今晩も空には綺麗でまん丸な双月が輝いていた。
耳を澄ませば虫達の奏でる優しい歌声が聞こえる。
藁の上に寝そべり、レイラに背中を預ける形で横になる。
暗闇の中、気温は少し低く、背中から感じるレイラの体温がとても気持ちよかった。
「楽器も無いからアカペラだけどいいか？」
声をかけると、何かするのか？面白い事か？っと興味津々な様子で目を輝かせていた。
「現金なやつだな。　まぁ、お前にピッタリな曲だからな？」
「ガウァ？」
ギターも無く観客もいない静かな厩舎で私はそっと唇を舐め、声を震わしはじめる。
歌う曲目は勿論これしか無いだろう。
ジェフ・ベックやジミー・ペイジに並び、３大ギタリストの一人と呼ばれるイングランドが生み出した英雄エリック・クラプトンの名曲中の名曲。
―その名は
Ｌａｙｌａ―――

一夜明けて、なんとかレイラをすぐに戻ってくるからと宥めて朝食を食べにアルヴィーズの食堂へ入った。
どうやら私が最後の生徒みたいだ。
そして入った瞬間になぜだか大勢の視線を感じた。
「マンティコアを召還した方よ」
「あらあら、それはすごいですわね。でも、あまり見た事が無い方ですわね」
「あまり実力をひけらかさない方なんですわよ。きっと」なんて小声で囁きあってるのが聞こえて心が痛い。
予想以上にレイラを召還した事は目立ってしまったようだ。
この様子じゃ竜なんて召還したタバサ嬢はきっとエライ騒がれたろう。
沈みかけた気持ち切り替え今日の献立は何かと心躍らせながら自分の席に向かおうとした。

すると「こんなの人間の食べるモノじゃないだろ」「平民がここに入れるだけで光栄に思いなさい」「うっせ！やってられっか」と大声で罵り合う少年少女が目についた。
言わずもがな、主人公達である。

食堂内では朝から騒がしい2人組を厄介なものを見る目で静観している。
誰だってこんなツマラナイ騒ぎに割り込みたくないである。
私は一触即発な空気の2人に近くに寄った。
心の中では原作通りで何よりだと頷きながら喧嘩腰な2人の間に入り込み……
通り過ぎた。
それはもう現場では何事も無いかのように見事に通り過ぎた。
「えぇ！？」
横目で女生徒が奇声を発してガクっと椅子から転げ落ちたのが目に入った。
席の順から見て下級生だろうか、どこの誰だか知らんがドリフ級の見事な転げ方だった。
日本で生まれていたらきっとクラスの人気者になっていただろう。
どうやら彼女を含めて多くの生徒達がこの騒ぎを止める事を期待していたようだ。
面目ない。私には無理だ。
そしてすまんなサイト少年。
スクウェアクラスの魔法が使えたり、転生特典で精霊魔法が使えたり、実は”気”が使えますとかそんな吃驚オリ主じゃないんだ。
家柄も格式も高く無い、普通のどこにでもいそうな、ちょっと成長の仕方を間違えた唯（ただ）の男爵長男坊なんだ。
心で黙祷を捧げ、私は自席に着く。

でも大丈夫だサイト少年！
原作は最後まで読んで無いし、しかも原作知識も穴だらけの私だが、きっと君はルイズ嬢と幸せになれるよ。
うん！だから今は頑張ってくれ。

「あ、今日のスープ美味しい」

そんな呟きを残した今日の朝食風景だった。

個人的趣向（後書き）

本編登場曲
『ｌａｙｌａ』
エリック・クラプトン。

興味のある少年少女はお父さんかお母さんに「クラプトン知ってる？」聞いてみよう！
また、久々に聞きたいなと思う方はｙｏｕｔｕｂｅ等にありますのでどうぞ聞いてみてくださいね。
思い切ってＣＤ買ってみるのもありかもですね。。。

って…なぜこんな販売員みたいな事を後書きで書いているんでしょうかｗｗｗ
スイマセン。

こんなところで今回は失礼させて頂きます。
次回はギーシュＶＳサイトの決闘編（？）を書きたいと思います。

またお会いしましょう。
ニックでした。

妙なフラグと誇り（前書き）

更新を待っていてくれた方々がいたようで（汗
とりあえず、ストックだけ投稿してみました。

妙なフラグと誇り

今朝もおいしいスープとボリューム満点の食事をじっくり堪能し、授業前の腹ごなしと、レイラの食事を兼ねて使い魔用の厩舎まで出向く事にした。

見上げれば、空は蒼くて太陽はいつもと変わらずシャカリキに大地を照らしていた。

今日も実にいい天気である。

そんな中ふらふらと厩舎前まで歩いていると、２人の女生徒がレイラを見上げていた。

一人はクルクル金髪縦巻ロールがどこかモンモランシ嬢を彷彿させるが、彼女に比べるとどこか幼さを残している印象受ける小さくて可愛らしい体躯をした美少女。

とても可愛い少女だ。

私の心に眠る何かがギャラクシアンエクスプロージョンしそうだ。

……失礼。　ちょっと錯乱した。

さておき、もう一人は清楚な茶色のロング。キリリと吊りあがった目が、なんとも勝気そうな雰囲気をだしている見立てでも百七十センチちょいオーバー美女だった。

一見優等生タイプに見えるが、あれは将来、絶対に夫を顎で使うタイプだ。

私の男心に眠る何かが彼女は亭婦関白であると訴えている。

間違いない。

どちらにしても、見覚えの無い顔の2人組みである。
マンティコアが珍しいのだろうか？
女性にしては少し変わった趣味である。

「うちの相棒カッコイイだろ？」

マントと制服から下級生であろうと見切りをつけ、上級生だと云う事で警戒されないように気さくに話しかけてみる事にした。

「わぁ」
「ぬぉ！」

身長差のある凸凹美少女後輩コンビは急に後ろから声をかけられ吃驚させてしまったようで、小さい背丈の少女は可愛らしい悲鳴を、逆に勝気そうな長身の子はうら若き女性らしからぬ、何んとも言えない悲鳴をあげた。

だが、そこ後はさすがの本物貴族令嬢。
私を見ると急に取り繕ったかのように姿勢を正した。
しかし、残念な事に勝気の少女よ……『ぬぉ』は無いだろう。

「どっどどどうも、コルフィーヌ・ド・ルーベンスです」

意外な事に先に立ち直ったのは気弱そうな少女のほうだった。
小さな体をいっぱいに動かして、挨拶する様は栗リスを彷彿させます。
神奈川県の鎌倉にいっぱい生息していましたね。
予断ですが、野生のリスは病気持ちが多いので迂闊に触ってはいけません！
お兄さんとの約束です。

「へぇ…あなたがミスタ・アーモンドね？
私はフィーセ・ランセス・ド・コルスティーヌ。　フィーセでいいわ」

慇懃無礼とはこのことか。
茶髪の背高い少女はまるで先ほどの「ぬぉ！」を無かった事の様に優雅にサラサラ茶栗色のロングヘアをなびかせた。

「ご丁寧にどうも、ちなみにアーモンドじゃ無くて、アッシュモンドね」

まぁ、ともかく挨拶を返す。
挨拶は大切です。
かなりガチガチな縦社会である貴族社会では挨拶しなかっただけで、決闘だのどーのという事に発展する場合がリアルにあるからだ。
怖いね貴族社会！
小生意気な現代っ子が着たら即死んじゃうだろうね！

「アッシュモンド？　どこらへんの方かしら、あまり聞き覚えが無くてよ？」
「ん？　しがない田舎町だからしょうがないよ」

フィーセ嬢は私の全身を頭からつま先まで舐めるように挑発的な目で眺めた後、ふふんと鼻息をならした。
そんなフィーセ嬢の背中に隠れるように恐縮した態度を見せるコルフィーヌ嬢。
見かけ通りなのが悲しいかな、挑発的な態度を見せるフィーセ嬢。
「ふ～ん、意外にガッシリしてるのね」

「はぁ、どうも」

私、この子苦手です。

どうもこういう子は前世から苦手でして……。

ほら？　なんていうか基本、私ってチキンハートなのでっ！

それに比べコルフィーヌ嬢のおどおどした様子と言ったら……たまりません！

ん？　ルーベンス？　どっかで聞いたような……まぁいいか。

「それで、私と使い魔に何か？」

「ふふ、いいえ。　今日は挨拶だけよ。　行きましょコルフィ」

「うううう、うん。　待ってフィーセ！」

そう言ってスタスタと踵を返して厩舎を後にしようとする2人。

なんだろうか、このモヤモヤとした不完全燃焼感は。

私の心に眠る逆境魂に何故だか火がつき、彼女達の後ろ姿に向かって――

「ぬぉ！」

思わず呟いてみました。

すると、フィーセ嬢の方が立ち止まり、こちらに振り返ろうとした瞬間に、私はレイラに跨り上空へ非難した。

地面のほうで降りてきなさいとかどーか聞こえますが、無視です。

私はただ「ぬぉ！」っと呟いただけなんですから……。

そんなフラグめいた邂逅があってから2日が経った本日。
私、ギムリ・ド・アッシュモンドは自室で今夜酒場で演奏するライブプランを一人「あぁでもない」「こうでもない」と呟きながら頭を悩ませていた。
路上ライブ等と違い、定点ライブ演奏と云うものはアドリブやその場の空気で乗り切れるようなものでは無い。

オーディエンスとの一体感。

つまりは調和や共有という要素も成功への大きな鍵になってくるからである。
そのためにアーティストの中ではライブ前や前日にイメージトレーニングを行う者達が多い。
中には座禅を組んで瞑想をする人もいるそうである。

「とかく選曲が難しい。
整理ライブ初期こそハルケギニアの人間に受け入れやすいようにポップス、古典ロック、バラード等中心に演奏をしてきたが、そろそろラップやR&Bなんかも取り入れてみてはどうか……悪くないかもしれない。　いや、でもさすがにバランスが悪いし、前衛的すぎるか……」

素人に毛が生えた程度の私が毎週のようにライブを行うには緊張の緩和などの意味も込めて、こうやってライブを想定したイメージトレーニングは必須であったのだ。

「やはり、前列の女性は私に惚れているな。　ふふ」

イメージトレーニングの途中、妄想が過ぎてしまうこともしばしば……。
まぁ見逃してくれ。
「誰が誰に惚れてるのよ？」
「ウップス！！」
振り向けば、モモランシー嬢が勝手に私の部屋に入って来ていた。
「どんな驚き方してんのよ」
そういって彼女はスタスタと部屋に備えてある椅子に、私と向かい合う形で座った。
「ミス・モンモランシ？　ここ男子寮だよ？」
「知ってるわよ」
「そして私の部屋ですよ？」
「そりゃそうでしょう、アンタに用があったんだから」
いや、いいんですけどね？
ただノックくらいして欲しかったです。
ともかく、モモランシー嬢は何か私にお願いがあるそうで―。

「ギーシュが落ち込んでる？」
「そうなのよ」

聞けば先日、ルイズ嬢の召還した人間使い魔君に決闘を挑んでボコボコにされたらしい。
案の定、ギーシュのプライドはズタボロに……。
さらに学生間での彼での風評が酷い事になっており、それを気にして今にも首を吊りそうな状態だとか。

すっかり忘れていましたが、原作イベントですね。
サイト少年がやってくれたようです。

ちなみに決闘時の私と言えば……。
なぜか件の後輩少女達と会った後、レイラの機嫌がすこぶる悪くなってしまいまして、甘噛みという名の本気バイティング（噛付き）から逃げる事数時間。
その後訳もわからず謝り倒して、なぜか尿を……（マーキングですか？）されていたりで、サイト少年の勇姿は拝見できなかったわけです。

まぁ、変に原作と関わらずにすんで良かった……のか？

「私が喋りかけても、ぜんぜん反応してくれなくて」
「さみしいと？」

「べべべべ、別にあああ、あんな間男の事はどうでもいいのよ。
でも、空気が悪いって言うか？　なんか可哀想って言うか、ほっ

とけないって言うか――」

ツンデレですね。

素直に言えばいいのにトリステイン貴族の女性はプライドが高くて評判ですからね。

ツンデレはルイズ嬢に限った事ではないのです。

そう、ここトリステインはツンデレ貴族の国と呼んでも過言では無い国ですからね。

「それで私に何をしろと？」

そもそもガンダールヴなんてチート野郎を相手にするからいけない訳で、いや『魔法の使えない平民に負けた』と云う事実のほうが重要なのか？

この世界の貴族の少年少女は『貴族は平民よりどんな点でも優れている』なんて本気で信じ込んでいますから、当然、平民に負けたギーシュの世間体も悪くなる訳で……今に至ると。

「彼を慰めて欲しい……いや、駄目ね。

余計にプライドが傷つくし……あぁ！　もう、とにかくなんとかしなさいよ！」

「えぇ！　全て丸投げですか！　なんという横暴！」

「あら忘れてしまったのかしら？

私がいなかったらあなたはとっくにブリミルの所に先立って逝ったのよ？」

新歯磨き粉事件のことですね。

あの時はお世話になりましたミス・モンモランシー。

「それを言われると辛いモノがりますです……ハイ」
「まぁ、あまり期待はしてないけど、こういう時って男同士のほうがいいんでしょ？
私が慰めると逆効果ってキュルケに言われたし……」

そう言うと少し影を落とすモンモランシー嬢。
まぁ、貴族男子は矜持だけは1人前ですから、好いてる女性に同情されるなんてギーシュじゃ耐えられないでしょう。
キュルケ嬢もよく男心を理解なさっていますね。

「何ができるかはわからないけど、やれるだけやってみる」
「とりあえず頼むわ」
「了解ですマム」

とは言ったものの、実際どうしらいいもんか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6776j/

ギムリの夜明け

2010年10月10日12時20分発行